主はわたしの牧者

―河本かつの信仰生涯―

主はわたしの牧者

―河本かつの信仰生涯―

目次

一、河本カツ姉記念会（記録）……1頁
一、老聖徒の思い出（河本カツ姉）……高木　敏夫　60
一、おばあちゃんの思い出……河本　米子　67
一、戦前の八幡前田教会（基督伝道隊八幡基督伝道館）……畠山　英子　78
　　――河本カツ姉の思い出を軸に――
一、河本のおばあちゃんの思い出……池田　操　129
一、河本カツ姉の思い出……野村　末義　131

一、彼らの生活の最後を見て（ヘブル十三・七）　・・・・　岩隈　多賀子　135
一、河本カツ姉の思い出　・・・・・・・・・・・・・・・・　伊規須　太郎　140
一、河本のおばあちゃんの思い出　・・・・・・・・・・・・・・　大口　種義　142
一、河本のおばあちゃん　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　大口　和子　144
一、わたしは平安をあなたがたに残して行く　・・・・・・・・・　下松　光子　146
一、河本カツ姉を偲んで　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　小松　南子　148
一、河本奥様の思い出　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　槇本　百合子　151

河本カツ姉記念会（記録）

昭和六十一年六月一日（日曜日）午後　　基督伝道隊　八幡前田教会に於いて

讃美歌　五一三番

槇本師　祈り　（略）

（テモテ第二の四・七朗読）

「わたしは戦いを立派に戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」。

これは、パウロが若い伝道者テモテに書き送った晩年の手紙でありますが、河本の奥さんを一言で申し上げるなら、パウロと同じように「わたしは戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を走りつくし、信仰を守り通した」、このとおりの御生涯ではなかったかとしみじみ思います。

今写真を見ると、当時とちっとも変らない表情をしておられますが、奥さんはクリスチャンの家庭に生まれ育って参りました。

河本の御主人と結婚なさる時、河本さんが真宗の安芸門徒でしたから、奥さんのお父さんが結婚の条件として、信仰だけは守らせてもらいたい、それだけ注文なさったそうです。

それで結婚されて、お姑さんが仏壇にお花や御飯をあげなさる、この点で河本の奥さんは賢明な方でした。 これは姑さんの信仰なんだからと手伝ってあげなさった。 それでお姑さんも何も言うことができなかったそうです。

初めは、中央町の方で店を持っていらっしゃったのですが、その近くに…亀屋の最中の店がある所にルーテル教会（ヒゲの生えた川瀬徳太郎先生）があって、そこで礼拝を守っておられました。 また、救世軍にも近くて、そこで礼拝を守ることもあったようです。

奥さんのお母さんが門司におられて、足が悪くて座ることができなかった。

ある時、奥さんの弟の洋太さんが町を歩いていると、路傍伝道で神癒の話をしていた。　洋太さんは今の教団の門司教会の信者でしたから、自分の教会では、今でも病気が治るなんて話はきいたことがない、昔なさったけれども、今もイエス様が癒しなさるのなら、母の足も兄の胸の病気も癒していただけるにちがいないと路傍伝道した人を捜したけれども見つからなかった。　そうした時に、福岡の基督伝道館（福岡大濠公園教会）の折滝先生が城さんの所と門司の鶴原薬局の親戚のお宅で家庭集会をされることになって、そこで皆さんが恵まれなさった。　折滝先生が神癒のお祈りをなさるというので、ぜひお祈りしていただきたいとお願いしたわけです。

折滝先生が下川さんのお宅にお祈りに行かれた時、お母さんが御自分の足が悪くて接待ができないからと河本の奥さんにお手伝いをたのまれたのでした。

そこで折滝先生が、神様について、罪について、贖いについてお話なさり、主の十字架の贖いは病気の原因である罪を許していただくものである。　原因

がなくなるのだから病気も治る。　神様がいやしてくださるのだから…そうゆう話を聞いている間に、御本人も気付かなかったが、長年曲がらなかった足がシャンとなって正座をしていた。　すっかり治っていたんですね。　それでお母さんも家族も喜んで喜んで神様を崇めました。

河本の御主人もその事実を目の当たりにして、神様は今もいきていらっしゃる、おほこらの中に納まっている神様とは違って、今も真心もって信頼すれば、現実このように答えてくださる活ける神である。　このことをお知りになった。それまで、信仰は自由だということで、奥さんが教会に行くことは認めていたが、御自分は仏教信者だからという御気持ちでいらっしゃった。　しかし、目の前に事実をもって、こんなに医者からも治らないと言われていた病気が、本人も気付かない内にいやされた…この事実でもって、神様は生きていらっしゃることが打ち消すことができないものとなった。　この神様を信じることが人間の生きるべき道だとお悟りになって、御主人と奥さんは新しく神様の前に悔

い改めてバプテスマをお受けになった。　紫川でしたが、その時私も一緒に受けました。

奥さんも今までの信仰ではなく、聖書的な信仰でなくてはだめだとお考えになって、御主人と御一緒に月一回の城さん宅の家庭集会に出ておられたのですが、それでは満足できないと福岡の礼拝まで出られるようになりました。

当時は、盆と正月ぐらいしか店は休まない時代でしたが、日曜日に店を休んで出て来られました。　また、正月の新年聖会（当時は五日間、三十一日の除夜会を入れると六日間）に忙しい中を一切を投げ打って、まず神様の前にという気持ちで出て来られた。

当時、献身して教会におりましたので、小柄だけど丸まげの綺麗な（お人形さんのような）奥さんが来られる。　横にはいつもガッチリした体格の御主人が控えておられて、どなたかなと思ってました。　後で河本さんとわかったのですが、八幡の城さんの家庭集会に出ていた頃にもお会いしているのですが、

そんなに記憶になかったので、その時初めてお会いしたように感じたのです。

礼拝に出ておられる時の河本さんはいつもニコニコして、本当にこぼれ落ちそうに喜んで喜んでおられた姿を今も思いだします。　そして側にはいつも控え目な奥さんがお人形さんのような美しさで並んでおられました。

そうゆうことで、城さんの家庭集会に出ておられた皆さんが、なんとか八幡で礼拝を守りたいという願いを持つようになり、できれば教会が欲しいという祈りが積まれたわけです。　何年かして…昭和十年頃だったと思いますが、河本さんが店の二階の八畳二間を解放して下さって、そこで日曜日の礼拝を守らせていただくようになりました。　私共が福岡から交代で御用に当たり、日曜学校、礼拝、夜の伝道集会をして帰ることがしばらく続きました。

しかし、それだけでは足らないから、誰か専任者を送ってほしいと祈っておりました。　そうゆう時に、河本さんが今の八幡駅の近くにあった青果市場の前に漬物工場をもっておられて、そこに二階建の倉庫を建てなさった。　一階

が倉庫で、二階を住居にして一軒を従業員用に、一軒を私共に備えて下さったのです。　それで昭和十四年の十一月に、私が遣わされてこちらに参りました時に、河本の奥さんがそこに案内してくださいました。

私は倉庫の二階と聞いていましたから、壁も落ちすすくれ、クモの巣が張っているところを想像しておりましたら、なんと真新しい新築の家なんです。ガラス障子を開けると新しい畳の香りが、プーンと香ってくる。　こんな立派なお家に迎えていただいてと思いました。　「先生、しばらく自炊で大変でしょう」と、水屋の中にはイリコも味噌も何もかも用意されて、すぐ炊事ができるようにして下さっていました。　河本の奥さんが、細かい所まで気を配って、御自分がいろんな苦労の中を通って来られましたから、人の苦労に届く方でした。　しかも、こうしてあげますと決して表面に出しなさらない。　聖書にあるように、「右の手のしていることを左の手に知らせるな」、そのようにして下さいました。　暖かい心づかいの方でしたね。

また一面、御自分がキチッとなさる方でしたから、人がグズグズすることが大嫌いな方でした。　イエスかノーか！というわけですね。　たとい失敗しても、ハッキリしておればとがめませんが、チョコチョコ目先をごまかすような事をした時は、承知できない方でした。

これは、信仰の上でも同じことだと思います。　神様の前に正直に認めさえすれば、どんなあやまちでも、主は許して下さるが、それをいい加減にごまかしたりすると、主はあくまではっきり認めるまで追求なさいます。　そうゆう点で奥さんは、聖書に養われておられた人だと思います。

河本さんが事業一本でいらっしゃる、その陰にあって、奥さんが助け人として一歩引き下がって支えて来られました。

終戦後の焼跡に、前の会堂を河本さんが「マッチ箱のようですけれど、御用のために使っていただければ」と、本当に謙遜に主の前に捧げて下さったので、今日の教会の出発点になったのです。

晩年になって、奥さんがいつも言われていたのは、「主人が家の近くに教会を捧げてくれたので、お陰で私も信仰を守ってゆくことができます」と、喜んで喜んで感謝して感謝して、晩年まで主の愛の中に信仰をもって歩んでいらっしゃった。　殊に、年を取って思うように体が動けなくなった時に、本当に神の愛の中にくつろいで、恵みに感じて感謝感謝と口癖のようにおっしゃっておられました。　そうゆう晩年でした。

病気でたおれなさってから、しばらく肉体的にはいろいろ戦いはあったと思いますが、心の中は動かすことのできない平安をもっていらっしゃった。

ある時、私はヨハネ十四・一「あなたがたは心を騒がせないがよい。　神を信じ、またわたしを信じなさい」、限りなき愛をもって愛しておられる神様が共にいて下さる。　甦った主が共にいて下さるから大丈夫です。　「わたしの父の家にはすまいが沢山ある。　もしなかったならば、そう言っておいたであろう。　あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。　そして、行っ

て場所の用意ができたならば、また来て、あなたがたをわたしのところに迎えよう」（同二一三）とおっしゃっておられるから、何も心配いりませんね、とお話すると、奥さんも喜んで永年、いろんな問題、悩みを通して、いつも聖書に照しては、御自分を整え、聖書に照しては問題を処理して来られたので、神を信ずるということはどんなにすばらしいことか、イエス様を信ずることがこんなに幸いだということを肌で知って、身につけておられたので、「神を信じ、またわたしを信じなさい」これが全部ですねと言ったら、あの言葉の十分出せない中で、喜んで喜んで頷いていらっしゃったのが、今も忘れることができません。

ですから、奥さんが若い時からいろんな問題の中を通って来られて、「信仰のよき戦いを戦い」とあるように、私共は罪については全部イエス様が勝ち抜いて下さったので、そのために戦う必要はありませんが、その主を信じてゆこうとすると、これを妨げたり、疑わせたり、恐れを与えたりするものが働いて

くる。　それを払除け、払除けしてゆかなければならない。　あれだけの大世帯、沢山の人を雇って事業をやってゆくのですから、随分心配も絶えない。いろんなことが次々と押寄せてくる。　その中を主に信頼しては、御言に立っては、それを乗越えていらっした。　そうゆう中で、手ざわるように主を知り、神様を知ることができた。

殊に、御主人が倒れなさった時、献身的に、これ以上のことはできないというほどに力を尽くして、看病をなさっていたお姿を見て、私は、主の前になすべき分を尽くしていらっしゃるなと思いました。

ですから、そうゆう中で主に信頼して主を知っておられたので、晩年、御自分が困難な病気の中を通られる時も、「神を信じ、また我を信ぜよ」その主の御言で平安と力をもっておられました。

これが、私共に、河本さん御夫妻が歩んで残して下さったすばらしい贈物ではないでしょうか。

ですから、テモテ②四・七「わたしたちは戦いを立派に戦い抜き」、…

確かに信仰もって歩もうとする者を妨げようとし、疑わせようとするいろんな問題が次から次へと絶えなかったけれども、その中で手ざわるように主に信頼していらっしゃった。

「走るべき行程を走りつくし」、

信仰には休みはありません。　絶えず信仰に立たなければ立っておれないような中にいつもおりましたが、そこで信仰の戦いを戦い抜き、走るべき行程を走りつくしておられました。　この点について、微塵も狂いはありませんでした。

「信仰を守り通した」、

最後まで「神を信じ、わたしを信じ」通しておられた。　最後に婦人会の皆さんに御言を送っときますと言って、「神を信じ、またわたしを信じなさい」、御自分が今、立っている信仰を婦人会の皆さんにもどうぞと私にことづけなさ

いました。　それほどに信仰の駆せ場を尽くしておられました。

「今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」、

パウロは、今、神様が義の冠を備えて待っていてくださる。　主が再び私共を迎えに来て下さる。　その主を待ち望んでいる人達を栄光の体と変えて、主の前に立たせてくださる。　そして、善であれ悪であれ、それぞれ報いを与えて下さる。　その時に義の冠、命の冠を神様が授けて下さる。

河本の奥さんも、やがて義の冠を授けていただける。　だからこのパウロが残した手紙は、また、河本の奥さんが私共に残してくれた手紙ではないでしょうか。

私共も信仰のよき戦いを戦い、走るべき行程を走り尽し、共に義の冠を授けて下さる主を待ち望んで参りたいと思います。

（一同祈り）

讃美歌　三七〇番

槇本師　お祈り　（略）

讃美歌　五二七番（愛唱歌）

食前の感謝（髙木兄）

河本信生兄挨拶

今日は皆さん、母のためにお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

母が、足が悪くなりまして、礼拝に出ることができなくなりましてから、沢山の皆さんが来て下さいまして、共々に感謝の時が与えられましたこと、母は何よりも楽しみにしておりましたし、また勇気づけられて参りました。

召されるまで、愛してやまなかった多くの教会の皆さんから、こうして記念の時を持たせていただいたこと、どんなに喜んでいるかわかりません。　本当

に感謝いたします。　生前の時を思出しながら、しばらくの時を過ごさせていただければ有難いと思っています。

高橋英雄兄　私はいつも「おばあちゃん、おばあちゃん」といって、信生さんと兄弟のようにして育って参りました。

私の親爺が八幡に出て参りまして、昭和三十八年、六十歳で亡くなるまでの四十二～三年間、河本の店で働いておりまして、おじいちゃんが死んだ後、信生ちゃんがまだ学校に行っていた状態の中で、親爺が店を見ていたという時もございます。

私としては、思い出深いおばあちゃんです。　物心がついた頃はもう店で遊んでおりましたし、家が戦災に会うまでは店の前でしたから、行ったり来たりでした。　教会も店の二階でしたから、私は生まれた時から教会とつながっていました。

子供の頃は私がガキ大将で、当時珍しかった三輪車を電柱にぶっつけてーー

おばあちゃんは叱りませんでしたがーー親爺におこられたり、集会中もよくケンカをしたそうで、大きくなりましてからおばあちゃんがよく話してくれました。　そうゆう風で、おばあちゃんとは家族同様に育てていただきました。兄弟五人おりましたが、みんなと一緒に、夏には海水浴に一週間ばかり楽しい時も過ごしましたし、旅行にも、兄弟の誰かが連れていってもらうという風でした。

とにかく私が悪かったのですが、おこられたという記憶はなく、楽しかったことだけが思い出されます。　おじいちゃんは（私が悪かったせいもありますが）恐ろしかったけど、おばあちゃんはいつも温和でやさしかったことを覚えています。

槇本師　高橋さんがお母さんの背中にチョコンと、セミが木にとまっているように背負われていた時からのお付合いです。

高橋さんご一家は、河本さんと家族のように、懇ろに生活を御一緒になさっ

ておられました。　ですから怒られることも、おじいちゃんからきびしくやられたこともあるし、またやさしくしてもらったことも、親が子をいたわるように愛してもらっていたと思います。

では英子さん、若い時から河本さんとこで、子供のように生活をしておられ、そこから西南の学校にも行った方です。

畠山英子姉　おばあちゃんのことになると、限り無く、信仰の面でもみて来ましたから、時間が足りないのですけれど、今日は二つだけ話したいと思います。

三十年ぐらい前、河本清造といって、河本のおじいちゃんのすぐ上のお兄さんの子供ですが、夫婦で来たんです。　その夫婦に子供ができないので、奥さんが悩んで、おばさん（カツ姉）に相談したんです。　そしたらおばあちゃんが、「あんたはできます。　あんたはすぐできる。　そのかわりイエス・キリストを拝みなさい。　東京に帰っても毎日拝みなさい。　必ずできます」というたんです。　「本当ですか、おばさん、他の神様をいろいろ拝んだんですけ

どできなかった」「いや、イエス・キリストは本当の神様だから私が太鼓判を押します。　今から祈ってあげよう」というて、そこで祈っておられました。それから四ヶ月ぐらいたって、「子供ができました。　おばさん本当でした」と喜んで手紙が来たことがありました。　それほど信仰が徹底して、人にもしっかり教えることができる方でした。　ですから、私は何でも河本のおばあちゃんに聞いてからしていました。

それから半面、とても憐れみのある方でした。　戦争前、河本さんの家の前に長屋があって、全部韓国人が住んでいて、みんな貧しい生活をしていました。その中に一人、マニラから帰って来た人で、主人から捨てられて、小さい子供と目の見えない父と三人で暮らしていました。　本人は結核の末期で、寝たきりの状態です。　布団の中にはうじがわいていたんです。　戦争中で食べるものもないということを聞いて、「英子ちゃん、今から見舞いにゆくから用意しなさい」というて、いろいろな品物を揃えて行ったんです。　そうしたらその

人は泣いて喜んで、お礼を言っていました。　何度も、そうして見舞いに行ったんですが、何とかしなければ、このままではと話して、それから郷里の四国の方に帰ったんですが、しばらくして亡くなったそうです。

そのように、誰にも負けない性格の半面、やさしい心をもって、困っている人を黙っていることができない方でした。

榎本師　奥さんが弱きにとどいて、思いやることのできる方だということを、私ももう一度思い起こさせていただきました。

野村末義兄　私も二十三年間河本さんの所においていただいて、いろいろとお世話になった者であります。

おばあちゃんのことについては、沢山の思い出がありまして、別に「ぶどうの木」に載せておりますが、ここでは一つだけお証詞したいと思います。

私が弱い体であり、また当時、霊的に非常に落込んでいて始末の悪い状態の時でしたが、御主人と相談なさって、私を大分県日出の別荘に連れて行って下

さいました。　名目は、別荘の畑に主人が野菜を植えるための下準備をするということで、おばあちゃんと二人で行きました。　一週間ぐらいおりましたでしょうか。　昼間は畑を掘りかえし、近くの海へ行って肥料にするための藻を取ってきて畑に入れたりしておりました。　おばあちゃんは、いつも私の体を気遣って「無理してはいけない。　ボチボチしなさいよ」とおしゃって、御自分は別の仕事をしておられました。　御自慢の腕を振って下さって、日出のお魚の料理を食べさせていただいたりして、おばあちゃんの最善の恵みを神様が私のために備えて下さいました。

新鮮な空気の場所で、わずかな日数ではありましたが、おばあちゃんが祈っておられる、霊的なご生涯の中に私も包まれて、何もおっしゃいませんが、そのお姿をじっと見せていただいている間に、私の霊状も、神様に立ち帰らなければならないという、いわば私の畑の掘りかえしができたような気がしました。

帰って暫くしてから、御主人が「あのね、あそこの畑は海草が入ったので、

とても肥えたんだよ。　カボチャも野菜もよくできとったよ」と喜んで下さったことでした。

そうゆう所で、私の沈下してしまった、硬く固まってしまっていた私の霊の畑を耕していただいた気持がいたしまして、どんなにか私のために祈って下さっていたんだなぁと思いました。　ルカによる福音書の中でイエス様がペテロのために信仰がなくならないように祈ったとおっしゃって、弟子達を顧て下さった、あの気持をおばあちゃんは私に対して、もっていらっしゃったことをしみじみと感じました。

それで今、おばあちゃんを記念して、御写真を前にして、やさしく思いやりのある、キリストの愛に満たされていらっしゃった、おばあちゃんをしみじみと覚えているわけであります。　同時に、私もそのかたい信仰のあとを歩んで行きたいと願っております。　おばあちゃんも、また天国にあって、今も私のために祈って下さっていることを覚えて感謝しております。

中村光恵姉　日曜学校が河本さん宅であっていた頃、お屋敷に入るのに二つ道があって、日曜学校に行く時に、高橋さんのお姉さんの京子さんと「こちらから行こう。　あちらから行こう」というてました。　それに私の家は平屋建でしたから、二階建の家が珍しくて珍しくて、きれいに掃除された螺旋状階段を昇って日曜学校に出るのが楽しみでした。

それから、私の結婚が遅くなって、二人の子供のいる家へ嫁いだ時も、「心配しなくていいよ、祈っているからね。　子供の悪いのは当り前だからね。忍耐もって育てなさい。　立派になるからね」と、いつも祈っていて下さったことを感謝しています。

また、武弘が高校に入るときには、「何という名前だったかね」と聞かれるので答えると、ティシュ・ペーパーの箱に名前を書いて、それを取るたびに祈って下さいまして、お陰様で高校も無事通りました。

昨年、おばあちゃんが亡くなられたことを武弘に話すと、「ああ、僕、来年

浪人するかもしれん」というので、「どうして」聞くと、「祈る人がいなくなった」というんです。　私達家族のためにいつも祈って下さって、船にのっている主人のためにも「海は大変だから、祈ってるからね」、顔をみるたびにおっしゃって下さって、感謝でいっぱいです。

槇本師　「義しき者のあつき祈りは、力あるものなり」とヤコブ書にありますが、おばあちゃんが信仰もって祈って下さって、どんなに多くの人々が祝福の中に導かれたかわかりません。

しかし、祈ってもらうから安心ではなくて、私達も力ある祈り手になるようにと、おばあちゃんは今も私共に語っていると思います。　どうか私共も祈り深い生活をして、主の足跡にしたがってゆきたいと思います。

岩隈多賀子姉　私は、戦後、ここが丸焼けになったあと、河本さんのお宅で礼拝が守られておりました時に、来るようになりました。

おばあちゃんはいつも、非常にきちっとした身なりで、乱れた服装をされた

のを見たことがありません。　それで私には、厳しい方という感じを受けました。

ところが半面、私にはうれしいことがあったんです。　私の家庭は年寄りから掃除についてやかましく言われておりました。　それを、おばあちゃんが、きっちりしている方ですので、私の母が亡くなって来られた時に言われたそうです。　「お掃除が非常によく行き届いている。　それは、柱の下の敷居を拭く時は敷居だけ拭くので、必ず柱の下の方が黒くなってくるのだが、岩隈さんとこにはそれがなかった」というんです。

それで、私は家の年寄りがやかましく言うのを、うるさいと思っていたんですけれども、そうゆうしつけを受けたということが、私にプラスになっているんだということを、おばあちゃんが言われたことで教えられたんです。

もう一つは、私が十六、七の番茶も出花の頃、やはり顔とかスタイルとかが気になる時期なんですが、私が女らしくない手足をしているんです。　ところ

がおばあちゃんが「岩隈さんの手をみてごらん、あの手は働いた手だよ」とおっしゃったそうです。　それをまた、先のことと同じように、畠山英子さんから聞きまして、それまで自分の手を人の前に出すのが恥かしく、寒い時に火にあたりなさいと言われても、手を出すことを控えておりましたが、それを聞いて、そうゆう風にみて下さる方もいるんだなと気づいて、これもまた、私にとって精神的にプラスになりました。

槇本師　晩年、おばあちゃんが礼拝に出られなくなった時、大変喜ばれたスピーカーをお家に設置して礼拝説教が聞けるようにしてあげた伊規須さんに。

伊規須師　私は特別なことをしたと思っておりませんが、主にあって、いつもここに出席されているように感じて礼拝させていただいておりました。

今、いろんな方のお話を伺いまして、私は詩篇一〇四篇を思いだすのですが、「なんぢの事跡(みわざ)はいかに多(おほ)なる」ということでありまして、個人においても神様は実にすばらしいことをしておられたと思います。　その中で一つ貫かれて

いた点は、神に従うをよしとし、従わないことはだめという、非常にはっきりした点がおありになったということは、すばらしいことだと思います。

それからよく言われておりましたが、くよくよするなという意味だと思いますが、「じめじめせんで…」そうゆことをおっしゃっておりました。　私は、河本さんの生きる姿勢というものが今でも思い出されます。

今日も八幡駅に降りまして、階段を降りた所で、ここでおばあちゃんがころんで大変だったんだなぁと思いましたが、今は、そうゆう心配もなく、休まれているということはすばらしいことだなあと思いますと共に、今日の記念会は、私にとりましてもうれしい記念会だと感謝しております。

高木敏夫兄　最初におばあちゃんの信仰の思い出から語りたいと思いますけど、「まず神の国と神の義とを求めよ」という御言がありますように、おばあちゃんも先代の御主人も二人して、まず神の国と神の義とを求めよ、神第一ということは教会生活ばかりではありませんで、日常生活から事業からすべてに亘っ

て神第一の方であったということをしみじみ思わされます。

御主人なんかは、よそに出張されても、日曜日にはチャント帰って来られて、前田教会で礼拝されたということで、ビシッとした筋の通った…拓植先生が言われた天国武士というようなお二人だったと思います。

また先生を一貫して、神のしもべとして立てておられたということを非常に教えられます。　おばあちゃんは、晩年は礼拝に出られませんでしたけど、おばあちゃんがいることによって、本当に一つの柱がピチッと立っているような感じを受けました。

私も月一回、訪問させていただきました。　あまり長居してもいけないから一時間にしておこうと思いまして、門を入る時は時計を見て、予定を立てて行くんですけど、おばあちゃんと奥さんのもてなしがあんまりよいもんですから、話がつきませんで、二時間、三時間となってしまうくらい本当に楽しかったんです。

私は、おばあちゃんを自分の母親のように思っていました。　偶然にも、誕生日が母と同じ八月十二日なんです。

最後の御召天の時は、私もベットの側で付き添わせていただきました。　その死顔は－先代の時もそうでありましたが－本当に、先の御言にありましたように「走るべき行程を走りつくし、信仰を守り通した。　今や義の冠がわたしを待っているばかりである」というその御言がそのまま表情に現れているようでした。

私は、河本ご夫妻を見ながら、宮沢賢治じゃないけれど、あのような人になりたいというのが私の願いであり、またご夫妻を手本としてここまで来させていただきました。

それから今度は生活の面になりますけど、（箴言三一・　一〇－三〇朗読）何度読みましても、この御言一つ一つが、おばあちゃんの歩みそのものと思います。　本当に信仰に堅く立った結果は、そのようになっていると思います。

もう一つは詩篇一二八・一一四「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。　あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう。　あなたの妻は家の奥にいて多くの実を結ぶぶどうの木のようであり、あなたの子供達は食卓を囲んでオリブの若木のようである。　見よ、主を恐れる人は、このように祝福を得る」。

そのとおり、河本家が今こうして先代に残された信仰に従って、信生さん御夫妻、また三人のお子さん達が受け継いでいらっしゃって、「見よ、主を恐れる人はこのように祝福を得る」ことを神様が立証を与えておられる。　私はそのことを本当にうれしく思うし、また神様に感謝しております。

それから、先程の「あでやかさはいつわりであり、美しさはつかのまである」と、あでやかさ、美しさは、まあどうでもよいというように書いてありますが、河本のおばあちゃんは、先程先生もおっしゃったように、私もおばあちゃんの若かりし頃の写真を何枚かみせていただきましたけど、本当に東京の深川か赤

坂あたりの芸者も顔負けするようなベッピンさんでね（笑い）。　明治時代から大正時代の写真を見ると、たいがいブスクレが多いんですけど（田舎の話ですが）、おばあちゃんはスカッとしていらっしゃる。　主を恐れると共にそうゆうことも神様が備えておられました。

もう一つは、伝道の書十二・一に「智者の言葉は突き棒のようなものである」とありますが、おばあちゃんは亡くなる直前にお伺いした時も、言われる一つ一つが核心をついていらっしゃる。　信仰にもとづいた核心、私は一言一言に教えられ、最後まで教えられました。

このように神様を恐れる人は、霊においても肉においても豊かに祝福して下さるということを、おばあちゃんを通してみせていただきました。　私もそのようにしていただきたいと願うものであります。

榎本師　私達が結婚した時に仲人をして下さったのが、河本さん御夫妻なんです。

その時が、御夫妻にとって丁度二十五年の銀婚式に当る年だったそうです。

その時、お二人で撮られた写真を持っていますが、今見てもすばらしいなと思います。　では、その時お世話になったもう一人の人…

百合子奥様　河本奥様と初めてお目にかかったのは、私共が結婚をした時でした。

御夫妻が聖書をもって、福岡におりました私の所に来て下さいました。　それがお会いした最初でした。　それから四十五年、本当に親子のようにして、陰になり日なたになりお交わりさせていただきました。

前のことを考えますと、あの時もこの時もといっぱいの思い出がございますが、一言、申しあげますと、「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識に頼ってはならない。　すべての道で主を認めよ」（箴三・五ー六）、これは一昨年の婦人会の旅行でいただいた御言ですが、この御言そのまんまを生涯通して歩んでいらっしゃったと思います。　なんとかして主の御愛に応えたいと、その願い一筋に歩んで来られた御方だなと思います。

それと詩篇二十三篇「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐

れません。　あなたがわたしと共におられるからです」（四）、この御言が、晩年、御病気のつらい中をお通りになりましたが、その時にも心の中には、この平安をもって凱旋されたと思います。

この二つの御言は、生涯忘れることができません。

林　正二郎兄　私達が教会に来るようになりましてから、ずいぶん、河本のおばあちゃんはじめ御一家の皆さんにお世話になりまして、新しい交わりの中に入れていただきました。

皆さんが言われたように、真実で、本当に神様を恐れる方だったことを、おばあちゃんと交わるその都度教えられ、私達もそのように歩みたいと思っておりました。　おふくろが礼拝に来た帰りには、河本のおばあちゃんの所に寄っては、親身になって話を聞いていただいたり、祈っていただいておりました。

私の弟が、高校時代や大学に入ってからも、信生さんにもお世話になりまして、アルバイトに行ったのか迷惑掛けに行ったのかわかりませんけど、随分お

世話になりました。　おばあちゃんにも可愛がられて、今は広島におりますけど、会えばおばあちゃんのことが話しに出て来ます。　晩年、私達が教会の近くに住むようになりましてから、ちょくちょくお邪魔するようになりましたが、高木先生もおっしゃったように、ちょっとと思っておりましても、ついつい長話してしまって、帰りそびれるような風でした。　お会いする度、おばあちゃんは口グセのように、「何をおいても神様を信じてゆきなさいよ、神第一にしてゆきなさいよ」と絶えずおっしゃって下さいました。　私達もおばあちゃんのように、どんな中にあっても神様を見上げてゆかれるように―――そのことをおばあちゃんの歩みの姿勢を見て、教えられることが沢山ありました。

以前、夜の勤めの帰り、おばあちゃんの部屋の前を通るたびに、いつも部屋の明りを見ておりましたので、元気でいらっしゃるのが当り前のように思っておりました。　亡くなられた後、部屋の明りが消えているのを見て、ああもうおばあちゃんはいないのだなとさびしく思っておりました。

私達もおばあちゃんの信仰の足跡を踏みながら、見習いながら、再びおばあちゃんと会うことができるような生活、信仰の歩みをしてゆきたいと思います。

太田邦子姉　河本のおばあちゃんのことで結びつくことは、おおらかな、大きな愛の方であるということです。　あまり長い時間お話したことはありませんが、教会に参りまして、一言二言お話いたしますと、すごくホットすると言いますか、言葉が無くてもそんな感じを受ける方でした。

一番思い出になりますのは、私がまだこの教会に足を運び始めた頃、愛餐会か何かで、その時のお料理が味つけ御飯に何かの煮ものでしたが、それが素晴らしく美味しく味つけていまして、どなたがなさったのかと教会の奥様に聞きますと、河本のおばあちゃんが一人でなさっておられるということで、それが、ちっとも疲れた風もなく、静かに事をこなしていらっしゃる姿をお見受けしました。

それから私がバトンタッチいたしまして、愛餐会などで料理を担当させてい

ただきましたけれども、とてもあのようにはゆきませんで、バタバタ…味の方も失敗ばかりでしたでれども、おばあちゃんは静かによく動かれる方、また頭も良い方だと思います。　そのことが一番胸に刻み込まれております。

御主人様とは、私が来だして日も浅かったこともあって、あまり言葉をかわすこともありませんでしたけれども、ただいらっしゃるだけで、何か安らぐ…もうお見えにならなくなってからは、柱が無くなったような感じを持ちましたが、おばあちゃんもそのような思いをいたしました。

そうゆうものを残していただいて、感謝しております。

○○○　姉　私もこの教会では長いんですけども、最初の頃に、河本の御主人と奥様とが寄添うように会堂の前の方にーーー冬の寒い季節になると、ストーブのそばの席に座っておられたことをふと思い出しまして、すばらしい御夫婦だな、私もああいう風な夫婦になりたいなと最初に感じました。

私はこの教会をしばらく出たり入ったりいたしましたが、いつでもおばあち

ゃんが前から二番目の席に座っていらっしゃるのを見て、先程も言われたように、柱のような安らぎといいますか、どっしりしたものを私共にも与えていただいていました。

本当に信仰的にすばらしいお方で、昨日の婦人会の旅行の時も、河本の若奥様からお母さんのお証詞をいろいろ伺わせていただきましたが、まあそんなにすばらしいかただったのかなあって、ただただ教えられるばかりでございました。

これからも、おばあちゃんの後を慕って歩ませていただきたいなと願っております。

大口和子姉　おばあさまには、母の代から随分お世話になりました。

母が亡くなりましてからも、私達夫婦を招いていただきまして、マッサージをさせていただきました。　礼拝後すぐにお伺いいたしますと、お昼の御馳走を備えていて下さいまして、本当にもったいないくらいもてなしていただきま

した。　マッサージをさせていただきながら、お話をお聞きする中で、おばあさまがこんなにすばらしい方だと本当に身をもって教えていただきました。

いつかの、お雛様が飾ってある三月の節句に、おばあさま手作りのすばらしいお雛様を手で触らせて拝見させていただきまして、こんなに細かい事までなさっておられるのかと、参りますたびに知らされました。

亡くなられます前に一度伺いましたが、力さんのために誰か良い方がいないかと心から心配していて下さっているんですよと聞きまして、このように私達家族のために愛をもって祈っていてくださっているんだと思うと、このように良い嫁を与えていただきましたことは、長い間陰にあって祈って下さったゆえと感謝し、直接お礼を申しあげることができませんでしたけれども、天国で一緒に喜んでいてくださっているのではないかと思います。

高木ツルヱ姉　私もおばあちゃんが教会に見えられないようになってから、時々お伺いしてお話を伺いました。

御主人が救われた時のこととか、気難しいお姑さんに仕えたこと、商売のことでいろいろな事があって、その戦いに勝った時のことなどのお話をお伺いしまして、おばあちゃんは今は何もなくて平安そのものでしたけど、大変な中を通られましたねとお話したことでした。

証詞をされた後では、私を含めて、人を見てはいけませんよ、どんなにできた人でも、人は人であって、いつも神様を見上げてゆかねばなりませんよ、と言って下さいました。

ヘブル十二・二「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか」。　この御言をもって、いつも結んで下さいました。それで、私もいろんな中を通ります時に、おばあちゃんのことを思い起こしては、いつでも主を見上げ、神様によって勝利を与えていただいて、歩ませていただいております。

野村美恵子姉　私もおばあちゃんにお世話になりました。

三十年も前になりますか、子供が小さかった時、美紀子がお腹をこわして、赤痢か何かに罹った時と思います。　お医者さんは入院を勧められますけど、入院するには、まだ仰一、恵子も小さかったので困っておりました時に、河本のおばあちゃんが、二人連れてきなさいとおっしゃって、恵子と仰一を預かって下さって、四～五日、主人も共に毎日の食事から、お忙しい中で助けていただきました。　お陰で私は、美紀子の看病に専念できて、ただ、おばあちゃんのやさしさに心打たれて感謝いたしました。

それからもどれだけ、おばあちゃんが、野村さんのために祈っているよとおっしゃって下さいましたか。　祈られて、祈られて、私達家族がこうして来ることができたこと、本当に感謝しております。

病気されてから、お邪魔してもという気持もあって、あまりお伺いできませんでしたが、祈禱会に来る時に、おばあちゃんが窓からのぞいて「野村さん」と声をかけて下さっていましたから、今でもあの窓から顔が見えそうに思えて

なりませんし、通るたびにおばあちゃんのことが思い出されます。

先生も言われたように厳しい面もありましたが、私達にはまねのできない暖かいお方だったなと思って、私もおばあちゃんのような生涯となって、神と人とに愛される者となりたいなと思っています。

槇本師　「飢え渇くごとく義を慕うものは幸いなり」とありますが、河本の奥さんは、主を渇いて求めておられた方でした。

各集会を非常に重んじて、大切にしていらっしゃった。　というのは、まだ教会の無かった時代に、本当に渇きを覚えていらっしゃったので、一回一回の集会が神様の前に近づく…すぐ隣りにいるから、再々集会は多いからという気持はさらさらなく、一回一回の集会を新しい気持で出ていらっしゃったのを、私は今も印象深く思い出します。

小松南子姉　お伺いした時に、ついで下さった美味しいお茶の味は、今でも思い出されます。

若い時の御姿はわかりませんが、年を取られてからの御姿は本当に美しく、姿だけではなく、すべての面でうつくしいなあということはいつも思っていましたし、私も年をとってから、あんなになれたらどんなに素晴らしいだろうか、おばあさまの五分の一、十分の一、まねができたらいいなと思っていました。

今から年を取るばかりですが、少しでもお手本にして学ばせていただきたいと思います。

林由紀子姉　私がお嫁に来ました当時は、おばあちゃんは遠い存在でありましたが、教会の近くに引越しましてからは、時々お茶に呼んで下さいまして、お交わりをさせていただくようになりました。

その中で、今も心の中に甦ってまいりますのは、神様に対する姿勢ということを、お茶を飲んでいる時、さりげなくおばあちゃんの口からでるんですね。足がお悪くなって、礼拝の時トイレが下にあるので、オシッコが近くならないように、前日の夕方から水分を控えていらっしゃる。　礼拝のために自分の体

のことから整えていらっしゃって、それは信者として当然のことかもしれませんが、おばあちゃんはさりげなく礼拝に臨む姿勢について言われたことを思い出します。

それから「とにかく信ずることよ、とにかく信じ続けないといけない」ということを、ある時は注意して下さり、ある時は暖かく話を聞いていただいたりしました。

礼拝に出られなくなって、教会からのスピーカーで自宅で説教を聞く時に、おばあちゃんはチャンと洋服を整えて、お一人で正座して聞かれてたんですけど、その時のおばあちゃんの態度は、立って歌う時は御自身も立って礼拝し、また神癒の祈りの時も「私も前に出たと思って祈っていただくのよ」と言われて、「まあ、おばあちゃん、たったひとりでここで聞かれているのに…私だったら、そんなに姿勢を整えて聞くことはしないと思うんですけど」というと、「私はいつも神様を前に置いているから…」とサラッと言われるんですね。

それと、おばあちゃんがずっと息子さん夫婦とお孫さんに囲まれて、毎日、感謝、感謝で過ごされている様子を拝見いたしまして、本当に、主にしたがって来られた方の老後の生活は、こんなんだなと思いまして、そのことをおばあちゃんに言いますと、「本当に感謝よ」と喜んでおられました。

済生会病院に入院された時も、お伺いしましたけれども、顔が輝いているんですね。　そして、米子奥様がいつも気をつけておばあちゃんを身ぎれいにしてあげているので、「おばあちゃん、きれいね」というと、本当にニコニコして喜ぶんですね。　「ありがとう、ありがとう」と本当に嬉しくて、嬉しくてたまらない御様子…岩隈さんが言われたように崩れた所がない、最後の最後まできれいなおばあちゃんの姿が思い出されます。

主人の母が老人病院に入院している時、私が行くたびに「香水をふってあげなさい。　年寄りはどうしてもきたなくなるから、回りにふってあげなさい」といって、香水をなんどもいただきました。

本当に女性としても、最後まできれいだったなあと思いました。　おばあちゃん、本当にありがとうございました。

槇本師　私もおばあちゃんとの半世紀に及ぶお交わりの中で、いろんな事が思い出されます。　殊に戦争中、実さんが召集を受けて戦地に出動するということが耳に入って、実さんに最後にもう一度会いたいというので、夜を徹して、どの列車かわからないけれども、列車が八幡駅に着くたびに窓を叩いては、尋ね探しまわっていたあの時のお母さんの姿、子供を思う親の心といいますか、その時、私も灯火管制の下で一緒に探したのですが、寒い時に尋ねまわっていらっしゃった、おばあちゃんの姿を忘れることができません。

また、いろんな問題の中にありながら、いつも真実な、暖かい気持をもっていらっしゃったおばあちゃんを思い出します。

ことに私の子供達をわが子のようにしてお風呂に入れていただいて、そのたびに目方を計って、何グラム増えたって御主人と二人で喜んで下さった事を思

い出します。

そうやって育てていただいた子供達は、今それぞれ家庭をもっておりますが、ここで和義におばあちゃんの思い出を話してもらいましょう。

槇本和義師　私は残念ながらおばあちゃんの告別式にも出ることがけきませんでした。　今日は記念会ということで、是非出席して皆さんの思い出をお聞きしたいし、また私もいろいろと思い出が多いいので、お話したいと思って出て参りました。

今、父が申しましたように、私は生まれる前から知られていたわけです。ですから、私にとっては「河本のおばあちゃん」なんです。　「河本さん」でもなければ、「おばさん」でもない。　私が小学生の頃（当時はまだお若かったと思いますが）、我家の子供達の中では「河本のおばあちゃん」で通っておりました。　肉の繋がりはないにしても、神様の愛による親子、親族、兄弟であるということをまず感ずるのであります。　本当に霊によって結び合わされた

者の恵みというものを、ずっと感じておりました。

私が大学に入って、おばあちゃんの元から離れましてから、おばあちゃんは寂しそうでもありましたし、また、うれしそうでもありました。　私達の成長を自分のことのように喜んでくれました。

兄も私もそうでありましたが、大学入試を失敗しました時に一番ガッカリして悲しんでくれ、そして陰で祈って慰めてくれたのもおばあちゃんでした。

私は大学に入りましてから、季節ごとに帰ることがありましたが、その時は必ずおばあちゃんの所によることにしていました。　行きますと、大体一時間から二時間ぐらいいろんな話を聞かせて貰いました。　そのたびに、いつも、教えられるのは、おばあちゃんは祈り続けておられる方だったということです。交わりの後はお祈りをして、共に恵みを感謝いたしました。

私共が昨年、神様の導きによりまして献身させていただいて、三月二十八日（木）にこちらに参りました。　次ぎの日の金曜日に、例によっておばあちゃ

んの所を尋ねたんです。　そして、いろいろとこれまでのことを思い出して、これからのことについても、御自分の信仰の体験の中からいろんな話をして下さいました。　私共の献身を最も喜んで下さったのは、おばあちゃんだったと思います。　本当に心から祝福して下さいました。　お会いした時から泣きっぱなしで、これからそば近くに来ましたから、たびたびお会いできますからと言って別れました。

ところが、その次ぎの日、おばあちゃんは倒れられたのです。　それ以来、私は心に掛かりながらも、病院に行きたいと思いつつも時間がなく、気付いた時には、天に召されたという知らせをうけました。

でも、私はよかったと思いました。　長い人生を神様と共に歩んで来られ、最後に一切の苦しみ、肉体的な重荷から解き放たれて、自由な所に神様は召して下さった。　そして、私共に対しても、一つの遺言として細々した事を語って下さり、また私共を喜んで迎えていただくことができたことは、私にとって

本当に感謝なことでした。

あれやこれやで、私はこちらに参りまして翌日お会いしたのが最後でありました。　それ以来、とうとう地上でおばあちゃんにお会いすることはありませんでした。　しかし、私の心の中にはいつも、おばあちゃんの思い出がいきています。　そして、事あるごとに、ああおっしゃってた、こうおっしゃってたとしみじみと思い出すのです。

最後に一つだけ、おばあちゃんについて強い印象をもっているのは、箴言三十一章にある「神を恐れる女は家の奥にいて、さまざまな仕事をなし、そして主の祝福にあずかる」という御言がありますが、おばあちゃんはまさに箴言の神を恐れる女の姿であったと、しみじみ思います。　（箴言三十一・十以下朗読）

私は、おばあちゃんが商売を始められた初期の頃の話を聞いたことがあります。　どんな苦労の時にも、御主人であるおじいちゃんを陰にあって助け、そ

して「終夜灯をともして」労を尽くされた方です。　本当におばあちゃんの生涯を現す言葉として、この箴言の言葉以外に探すことができません。　その意味で「あでやかさは偽りであり、美しさはつかの間である。　しかし主を恐れる女はほめたたえられる」（三〇）。　今、神様が河本のおばあちゃんの生涯のうえに成就なして下さった、さまざまな主の御愛を高らかにほめたたえ、また、おばあちゃんを心から尊敬し、心にいつも覚え続け、そしてさらに主を恐れる者となしていただきたいと願っています。

河本米子姉　今日はおばあちゃんの記念の時を持たせていただいて、本当にありがとうございました。

おばあちゃんの主にある八十九年のうち晩年の二十数年を一緒に生活させていただいた者ですけど、本当に、神様には従う、この一線だけは絶対に崩されない、崩してはならないという岩の上に立った信仰でございました。

お茶を飲んでいる時も「わたし、あんたに言っとくことがあるけどな」って

言って「信仰は岩の上に立つ信仰でないとだめだよ。　長い人生ではどんなことがあるかわからないから、神第一にして従いなさいよ」…これは年中、耳にタコができるくらい聞かされてきました。

一緒に過ごしている時は、そのありがたみはあんまりわからずに、いつも聞き流すような聞き方でハイハイというような愚かな者でございました。

またもう一つは、何をするにも、必ず祈ってからやりなさいよということでした。　娘達にも祈りなさいよ、祈ってからやりなさいよといっていましたので、娘達は何か事があると、頼り無い両親をさておいて、おばあちゃんの側に行って「おばあちゃん、祈っててね」「ウン、祈っているからね」というともう千人力を得たように飛び出してゆくんです。

おばあちゃんが亡くなってから思いますに、おばあちゃんの動かされない信仰と言うのは、病床にあった時も神様は共にいて下さるという平安が、絶えずおばあちゃんを支えていて「我、死の陰の谷を歩むともわざわいを恐れじ、汝、

我と共にいませばなり」、本当におばあちゃんの身についた信仰だったと思います。

病床でおばあちゃんの好きな詩篇二十三篇をもってお祈りすると、「アーメン」と大きな口を開けるんです。　声は出ませんけれどもーーーそして本当にうれしそうな顔をなさる・・・。　今、それを思い出します・・・。

娘の真理子が「お母さん、今日はチリ紙とハンカチを沢山もってゆきなさいよ。　また皆さんの前でワンワン泣出すよ」と言われたばかりです。

本当に、おばあちゃんのためにこうして記念会をもたせていただいてありがとうございます。　残された私共も、神第一に、心をつくし、精神をつくし、力をつくしてゆきたいと思います。

河本信生兄　只今、和義先生のお言葉をいただきましたが、お話の中に出ましたように、和義先生御夫妻がお見えになった次ぎの日に倒れたわけです。

本当に主にあっての家族として先生御一家を愛して愛して来た母が、百合子

先生、御長男の俊雄さん、和義先生について一言寸評を言ったことがあります。

百合子先生について「槇本先生には、一本気で頑固なところがある。　私達にきびしいところがある。　それを救って下さるのが奥様で、こんなやさしいできた奥様は金のワラジで探しても見つかるものではない。　あんた達は感謝しとかないけんよ」、こう言っておりました。

俊雄さんについては「あの人は本当に親切。　男に対しても女に対しても、子供に対しても年寄りに対しても分け隔てがない。　本人は根っから親切だから気がつかんだろうけれども、女性は自分だけ親切にしてもらえると勘違いするのではないか」、そんな心配もしておりました。

和義先生について「真からやさしい方、私のことをいつも覚えて下さって、帰るたびに訪問して下さる・・・。　いい牧師さんになる（涙声）。　学問が好きで頭が良いもんだから、大学の先生になってしまった・・・。　残念でしょうがない・・・」そう言ってました・・・。

ですから、御夫妻で献身なさって・・・、献身式の当日に聖餐式がありまして、昼から先生が礼服に身を整えて・・・、母に最後の聖餐式をしてくださいました。

動かない体で、威儀を・・・正して受けました。　そして「和義先生のこと、本当におめでとうございます」と言いました。　・・・感無量であったと思います。　本当に祈って祈って来た・・・和義先生が献身なさって・・・心から喜んで召されてゆきました。

先生にこの記念会のことをお願いしてから、ずっと母のことを考え続けて来ましたが、こんなに取り乱すとは予想もしていませんでした。

思うたびに、一つのことからずっと繋って、走馬燈のように次から次といろんな事が思い出されて来ます。　それを書いてきましたけれども、時間が足りませんので、家族の者が母の病床日記をつけたものの中から、子供達が書いたものを読んでみます。

倒れたのが三月の終りで、入院して肺炎を併発し、腎臓が悪くなってむくみが来ました。　非常にふくらんだようになって、見た目にも惨澹たる状態でした。　槇本先生が来て下さった時も、先程の話しにも出ましたように、身を整えることに気を使った人ですから、人が行って自分の状態を見られていたたまれない思いをなさるのではないかと、槇本先生もここで祈っていますからとおっしゃった。　それほどひどい状態でした。

体中がはれて、肌とかももとかがカチカチになるほど堅く、点滴が入らないような状態で、手の甲もボール一つ置いているようでした。　それに人工呼吸のパイプが喉を切開して入れてあります。　アゴも顔もパンパンにはれて、目を開くのがやっとでした。　これはもう長くないと思いました。　家内の米子は「大丈夫、おばあちゃんは必ず美しく変えられるからね」と信仰もって断言するんです。　けれども、見れば気がめいる、そんな状態でした。

そうゆう時、次女の恵が東京から日帰りのようにして帰って来ました。　お

ばあちゃんがそんな状態なら、行ってもわからないかもしれないので、紙に自分の名前を書いて行こうと言って行きましたが、「枕許で『めぐみよ』といったら、大きく目を見開いて起こしてくれというので、看護婦さんに頼んでベットを起こして貰った。『元気で頑張っています。何か食べたいものある？痛いところある？神様が一緒だから寂しくないよね』と言うと、大きな目を開けてじっと見ている。『おばあちゃん、いい証詞しているね』というと、黙って頷いた。さすがと思わせる生きざまを、まざまざとみせてくれた」。この日はこうなっています。

それからもう一つ。これは召される前の日、八月十一日（日）に長女の潔子が書いています。

「私の誕生日が過ぎてしまったことをすごく気にして、『ここには暦を持って来とらんから、ようわからん。これからは、前もって言っときなさいよ』と言ってくれた（この時には、喋れるようになっていました）。カレンダー

を認識できるということは、ボケでない基準になると日経新聞で読んだことがある。　明日はカレンダーを持って来てあげよう。

『おばあちゃん、自動車の免許取ったんよ』と言うと、目を丸くして『そうか』。　『早く良くなって、どこか遊びに行こうね』と言うと、『いやあ、めったに乗られんたい。　命がけやもん』と笑った（前の日でもこんな状態で、とてもよかったですね）。

それから耳垢を取ってあげた。　初めてなので、入口の所をチョットだけ、それも怖いので片方だけでやめると『こっちは？』と催促された。

私がお土産に買ってきたあべ川餅をおいしそうに食べてくれた。　あまり物を食べないと聞いていたので、ああよかったと、つくづく思った。　うれしかった。

水村さんと下松さんが見えている。　おばあちゃん、お祈りしていますと話しかけられると、『ありがとう、祈っていてください。　あんたがたも気をつ

けなさい。　病気になったらだめよ』と答える。　おばあちゃんはしっかりしたものだ。　『さしみが食べたい』という。　食欲が出て来たのかしら。　がんばれ、おばあちゃん」と書いています。

この日の病状を私が書いていますが、「血圧が高い。　米子以外みんなが帰った後、病室のクーラーが故障しているので窓を開けたが、母の足元にいる私に『信生、信生』と二度呼んだ。　『おばあちゃん、何か用？』と答えると、黙って首を振る。　そして眠った」。　こうゆう状態でした。

召された日に、潔子の手記があります。　「おばあちゃんの死に対して、後悔の念はない。　天国でまた会える。　昨日まで三日続けて話して、笑って楽しかった。　五月のままの状態だったら、話もできなかったのが、今度は声も出せて、楽しく会話もできた。　滅多に揃うこともなかった家族が全員、病室でみんなが見守る中、眠るように召された。

敬い愛してきた槇本先生、伊規須先生、高木先生が枕頭で祈り続けて下さっ

た。

平安で美しい表情、全く何のかげりもない。　走るべき行程を全うした顔。今は天国でハッピーであることを祈り、信じている」ということを書いております。

子供達もそれぞれ自分の道を歩むことになりますけれども、おばあちゃんの信仰をしっかり受け継いで、神を神として尊び敬い、神の言を守る生き方を家族一同、続けてゆきたいと思います。

どうもありがとうございました。

槇本師　潔子さんの手記を伺って、素晴らしい信仰をもって、天に召されなさった、おばあちゃんの最後を見送って、本当に御自分も悔いがないーーー主によって自由が与えられて、おばあちゃんも安らかにされているんだ、また、あそこで会うんだという望みを、信仰によってはっきりと持たせていただいている。それはもうすでに義の冠を受ける人の中に加えられているのだな…と、伺いな

がら思いました。

どうか後に残された御家族の皆さんが、おばあちゃんの願いのとおりに、信仰が全うされるよう、皆さんにお祈りしていただきたいと思います。

伊規須師　祈り　（略）

頌　栄　五四一

祝　禱

老聖徒の思い出（河本カツ姉）

高木　敏夫

「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」

（ヘブル人への手紙十一・四）

八幡前田教会の「隅のかしら石」であり、全教会員から敬慕された河本カツ老姉は、去る六十年八月十二日、八十九年の地上での使命を終え、天父の御許に帰られた。　御臨終のとき私はその枕許にいたが、実に安らかな最後であった。

カツ姉は、大正四年八月十三日十九歳のとき、旧八幡市中央町商店街で味噌・醤油の問屋を開店したばかりの二十四歳の若大将・河本小太郎氏と華燭の典をあげられた。　そのときの写真を拝見したが、まことに花も羞じらうばかりの美し

さ、艶やかさであった。

ご夫妻は昭和七年八月十八日、紫川において折滝鶴治郎師によって共に受洗された。　ご夫妻は神様を生涯畏れ敬い、神様にのみ信頼し従って行かれた。　また、榎本牧師を神の器として尊敬しつづけ、その伝道を陰にあって助けられた。「まず神の国と神の義とを求めなさい」（マタイ六・三十三）とあるが、ご夫妻はこの聖言（みことば）を徹底して実践された。　礼拝をはじめ伝道会、祈禱会、朝六時からの早天祈禱会などに必ず出席され、一番前のベンチで熱心に聞入っておられた。そして教会生活、家庭生活、事業の上にも常に神第一の姿勢を貫かれた。

河本のおばあちゃんは、信仰の人であると共に愛の人であった。　自分を愛するように隣り人を愛された。　前田教会の長老として教会の欠を補い、信徒一人一人にも温かい心づかいをしてくださったのである。　そしてこの愛の行為はすべて人に知られないようにされた。

彼女には子供がなかったが、事情があった親類の男の子三人を順次引取、実子

同様の愛をもって養育されたのである。　「だれが賢い妻を見つけることができるか、彼女は宝石よりもすぐれて尊い」（箴言三十一・十）。　この十節から三十一節までは、彼女の御生涯の記録そのままのようである。　彼女は、女性として、妻として、母として、また河本商店の「おかみさん」として、どこを見ても非の打ち所がなかった。

「彼女は生きながらえている間、その夫のために良いことをして、悪いことをしない。　その夫の心は彼女に信頼して、収益に欠けることはない」（箴言三十一章十一節・十二節）。　彼女は「内助の功」の人であった。　陰にあってその主人を助け、家庭と店を守った。数人の従業員がいたが、一緒になって漬物や福神漬の製造や味噌・醤油の販売に励んだ。　そのためご主人は後顧の憂いなく、商品の仕入れや配達など外回りの仕事に専念された。

「彼女はその商品のもうけのあるのを知っている、そのともしびは終夜消えることがない。　彼女はまだ夜のあけぬうちに起きて、その家の者の食べ物を備え、

その女たちに日用の分を与える。　彼女は家の事をよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない」（箴言三十一章十五・十八・二十七節）。

河本商店は、他のどの店よりも早く起き、夜はまたどの店よりも遅くまで家業に精を出された。　その結果、開店時の借金をわずか一年で全部返済してしまったとのことである。

いま河本家は、御主人の召天（昭和三十六年二月四日）後、三男の信生兄が立派に事業を受けついでおられる。　そして信仰も御先代にならい、いま教会の役員としてなくてならぬ存在である。　その夫人米子姉は、長年おばあちゃんに従順に仕え、その良き面を見習い、まことに奥ゆかしい女性である。　御夫妻に三人の娘さんがおられるが、おばあちゃんや、両親の信仰と人柄にならい、社会人・学生として、それぞれのところで良き証詞を立てておられる。　「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう。　あなたの妻は家の奥にいて多くの実を結ぶぶど

うの木のようであり、あなたの子供たちは食卓を囲んでオリブの若木のようである。　見よ、主をおそれる人は、このように祝福を得る」（詩篇百二十八篇一節～四節）の御言葉がそのまま河本家の上に成就されたのである。

おばあちゃんの最晩年は足が弱くなり、礼拝や各集会に出席できなくなった。そのため自宅で礼拝を守り、榎本先生の御説教をマイクを通して拝聴された。前田教会信徒の大黒柱的存在の彼女の姿が見られぬことは、教会員一同にとって穴があいたような感じであった。

おばあちゃんは、主にある人々の訪問をことの外喜んでくださった。　私も月に一回ぐらいお訪ねして交わりの時をもたせていただいた。　おばあちゃんと米子夫人は、いつも喜び迎え入れて歓待してくださった。　私はまず河本家全員とその従業員・事業の上に神様からの祝福をお祈りさせていただいた。　あとはほとんど聞く役にまわり、おばあちゃんの口から出る信仰のこと、商売のこと、人間関係、人生問題等などの体験談に聞き入ったものである。

「彼女は口を開いて知恵を語る、その舌にはいつくしみの教がある」（箴言三十一章二十六節）、また「知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなものである」（伝道の書十二章十一節）とあるが、その口から出る一言一句が私にとって箴言であった。

おばあちゃんはお会いする毎に、「感謝です」と連発された。　それはダビデ王がその生涯をふりかえり「わがたましいよ、主をほめよ。　そのすべてのめぐみを心にとめよ」（詩篇百三篇二節）と満腔の感謝を神様に捧げているのときっと同じ心境なのだろう。

おばあちゃんには、三月三十日脳血栓の為倒れ、済生会病院へ入院、以来四ヶ月余りの闘病生活を送られたのであった。　おばあちゃんは救いにあずかって、より堅く神癒の信仰に立ち、病院にもかからず、薬も飲まず、ただ全能者なる神様の御手にのみ信頼してこられたが、ことここに至っては神様の御手にすべてをゆだね切り、医師や看護婦の指示に素直に従われたとのことである。

おばあちゃんにはその入院中、愛する息子さん夫婦やお孫さんたちの手厚い看護を受け、槇本先生はじめ教会員一同の篤い祈りのうちに、何の思い残すところもなく神様の御許に帰られたのである。

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。 今や義の冠がわたしを待っているばかりである」（テモテへの第二の手紙四章七・八節）。 今や天にある愛するおばあちゃんには、「良い忠実な僕よ、良くやった」と神様からおほめの言葉を賜り、栄光の冠をかぶせられていることであろう。 そして先に召された御主人との再会を喜び合い、神様がその後の河本家になしてくださった祝福の数々を喜びをもって報告し、共に手を携えて父なる神様と主イエス様の前に立ち、心からなる感謝と賛美とを捧げていることであろう。

「主の聖徒の死はそのみ前にあって尊い」（詩篇百十六篇十五節）。

おばあちゃんの思い出

河本　米子

「あなたがたは心を騒がせないがよい。　神を信じ、
またわたしを信じなさい」。
（ヨハネによる福音書十四章一節）

おばあちゃんの神様に対する姿勢、それはどんな中にあっても、どこまでも「神様に従う」徹底した、神様第一、教会第一の姿勢でした。　その毎日の生活をとおして、信仰は勿論のこと、妻として、母として、また店を（従業員を含めて）たばねる一家の主婦としての忙しい日々の足跡は一人の女性としての大先輩でありまたどんな問題をもっていっても即、頼りになる生字引、知恵袋の様な存

在のおばあちゃんでした。

このおばあちゃんが倒れ、続いて入院、そして召されるまで（その間百三十八日）、一家が主にあっておばあちゃんを中心にまわっていたものですから、一時はポッカリ大きな穴があいた様な、広い所にポツンと置かれて、身の拠り所のない様な、なにから手をつけたらよいのか、おばあちゃんの存在が大きく偉大であっただけに（また実際居ながらにして、どっしりと存在感がありましたので…）急に回りに風が吹き抜ける様な虚脱状態でございました。

しかし、慈しみ豊かな神様は、このおばあちゃんを通して、様々なご愛の深さ、高さ、広さ、長さをお示しくださり、信じ従うものには決して恥をかかしめ給わずと、生前おばあちゃんがよく言っておりましたごとく、聖手のうちに守り支え導かれている幸せを心から感謝し聖名を崇めます。

主にあっての八十九年間のおばあちゃんの数々のエピソードの中から…

七歳くらいの幼児の頃、ある夕方お酢を買いにお使いに出て、右手にお金をしっかりと（当時何銭？）左手に二合ビンを握って、早く行って帰らねばと思いつつ途中、村芝居の前触れ口上の一行がおどりながら通るのがおもしろくて見たさいっぱい、後ずさりしながら気を取られていると井戸の中へ真逆さまに墜落して（当時の田舎の井戸には囲いの無いものがあったそうです）、気がついたら右手はお金をしっかりと左手は欠けた二合ビンの口もとを握ったまま底まで落ちずに、両足を井戸の左右に突っ張っていたそうです。　かすり傷ひとつなく、夕暮れ時でしたけれども、たまたま目撃者があったので、すぐ助け出され、家の庭に入ったとたん「わあっ」と泣出したとか、あの時のことは今思っても不思議としか言い様がないと聖手の守りを感謝しておりました。　小さい頃からしっかりしていたおばあちゃん。

十四、五歳位の頃でしょうか、当時ライオン歯磨の空袋をもっていくと、それ

を幾らかで買いとって、そのお金が孤児院に寄附される。　これに刺激されて、わたしも今に毎年二十円位は慈善事業に寄附出来る様になりたい。　人のために役立つ人間になりたい。　そのためには自分で仕事を持ち成功したい。　独身でとおしてもよい、と思っていたそうです。　後年、結婚して中央町に店を出し、地元の小学校に何がしかの寄附をしたら、卒業式の来賓に特別招かれ、そこで卒業生に一言挨拶と指名され、咄嗟のこととてなにを話してよいかわからず、「…とにかく神様を信じる人になってください」と、年も若かったし、あの時は大冷汗をかいたと笑いながら話していました。

中央町に住んでいた頃、高見官舎の城さんのお宅で開かれる家庭集会に出席するため、暑い時はよく水をかぶってかけつけた事、その際、途中の石垣にオシロイ花がいっぱい咲いていたので、この花を見ると当時が思いだされて懐かしい、とある夏の夕暮れ裏の庭での立話。　子供が多く貧しくてお盆がきても、ゆかた

一枚買えないと言う若いお母さんのために、毎日夕食代の一部を竹筒に入れてためてあげていた話。

戦時中、家の二階で集会がもたれていた時、よく特高が監視にきましたが、「こんな非常時ですから、なおさら神様に祈らなければなりません」と話すと、監視に来た人も「そうですね、奥さん、ぜひ祈っといてください」と言って帰っていったそうです。

空襲の激しくなった折、「奥さんは神様を信じているお方だから、一緒におらしてください」とついて来た女の人の話。

おばあちゃんはお料理が好きで、またとても上手でした。ＮＨＫテレビのお料理番組（土井勝さん）は特に見るのがたのしみの様でした。　割烹着をかけ台所

に立つ時は、きりっとしていて、思わず軽い緊張をおぼえたものです。　おばあちゃんの庖丁はいつも研ぎすまされ、お料理する時はまるで板前さんの様でした。ちょっとした物でも、このおばあちゃんの手にかかると、手品の様に、手早く、美味しく、垢抜けしていて、アイデアにみちたものがつくり出されました。　我家のお袋の味、ちらし寿司にお煮しめなど、この味付けは難しく、なかなか習得出来ませんでした。　「塩梅といってなあ」、口で教えるに教えられず、説明の出来ないものだったのでしょう。　今になって思います。　おばあちゃんは、きっと「お祈り」と言う隠し味のあったことを…。

昭和七年から病に倒れるまでの五十余年間、薬も飲まず、注射もせず、具合の悪い時は神様が癒してくださる。　人間は弱い者だから、具合が悪くなってお祈りはするが、医者に行き、薬を飲むと神様の癒しは忘れて、あそこの医者に行ったから、あの薬を飲んだからよくなったと主を主とせず、医者・薬を主としてし

まうので、只神様だけに依り頼むのだと聞かされました。

おばあちゃんの若い頃（昭和七年以前）ひどい頭痛もちで、殊に店に出てお客様相手に嫌な顔は見せられないので、いつも懐にノーシンを二、三袋入れていて、痛むと飲むし、また人にも勧めていたそうです。　しかし、下川のおばあさん（おばあちゃんのお母さん）が、折滝先生に祈っていただき、集会中まがらなかった足がいつのまにか癒され、座っているのを目のあたりに見て、神癒を信じ、それ以来、きっぱりと薬は飲まなかったそうです。　後年、中央町時代の知人と道でばったり会った時、「奥さん、目のまわりの黒いのがとれましたね」と言われ、かつてノーシンづけになっていた頃は目のまわりが黒ずんでいた事を思出し、また新たに感謝したと言うことでした。

ある時、店の工場で生姜を薄く切る機械を洗っていて、誤って左手中指の第一

関節のところを深く切った事があります。　その時も黙ったまま布を裂いてきつく巻き血止めをして部屋に上ってきて消毒しただけ、その間、痛いとの一言もありませんでした（指先のケガは痛いときます）。　その後も痛いとか不自由とか泣言は一切聞きませんでした。　おばあちゃんのケガの前々日、女性従業員一人が同じ状態で同じ様にケガをし、外科に駆つけ、手当を受け、通院しておりましたが、包帯の取れる時はくすしくも同じ頃でした。　後でその傷跡を見た時、思わず足もとがぞくぞくしたのを思出します。　それほど深い傷でした。

昨年（六十年）三月末に倒れ入院なさったわけですが、「病院に来たからは、病院のやり方に従う」と注射・薬を今まであんなに拒否していたおばあちゃんが、脳外科部長さんが、「明るい性格の方ですね。　看護婦に非常に協力的です。ありがたいですよ」と驚く程の潔さでした。

そのおかれたところで主に従う、まったく予期しなかった最悪の状態に置かれて、

年をとって体が不自由になり、家族から離れ、病院へ、その上回りは知らぬ人ばかり、しかも、体には管が何本もつながれ、身動き一つ出来ない状態（面会時間は極めて制限されていた集中治療室）にあっても不安がったり、めそめそすることは決してなく、苦しい最中も無理な要求をするでなく、最後まで実に聞分けよく、堂々としていたおばあちゃん、どこまでも神様を信頼して少しも恐れ不安がなかったのでしょう。

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわいを恐れません。
あなたがわたしと共におられるからです」。

常日頃、詩篇二十三篇が大好きだったおばあちゃん、走るべき行程を立派に走りつくしたおばあちゃんが、主にあって何者にも動かされない岩の上に立つ信仰を、身をもって教えてくれたことは大きな大きなかけがえのない遺産です。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。　それゆえ、わた

しは絶えずあなたに

真実をつくしてきた」。（エレミヤ書三十一・三）

御一方的に変らぬご真実をもって、ご愛の限りをつくしていてくださる、憐れみにみちた神様の御愛の聖手を思います。　感謝に絶えません。

「おおよそ主にたより
主を頼みとする人はさいわいである。
彼は水のほとりに植えた木のようで、
その根を川にのばし、
暑さにあっても恐れることはない。
その葉は常に青く、
ひでりの年にも憂えることなく、
絶えず実を結ぶ」。（エレミヤ書十七・七、八）

このみことばのごとく絶えず実を結ばせてくださる御愛の主に穏やかに信頼していきたく願います。　おばあちゃんの召された時の眠るがごとき平安にみちた、穏やかな輝く様に美しい顔は信頼するものに必ず応えてくださる神様の御愛を示しているものと思われてなりません。

戦前の八幡前田教会（基督伝道隊八幡基督伝道館）

―――河本カツ姉の思い出を軸に―――

畠山　英子

「我限りなき愛をもって汝を愛せり。　故に絶えず
汝を恵むなり」（エレミヤ三十一の三）

愛想が尽きる程の罪人である私を、今日まで許し生かし、恵みを給いました事を、主に感謝をせずにはいられません。　そして、幼い時より、大東亜戦争の暗い青春の時代の導き手であり、神にある人生を常にお教え下さいました槇本先生、今は天国にいられる河本のおばあちゃんに、感謝をいたしつつ、私の記憶にある限りの、八幡基督伝道館の事を書き記させて頂きます。

【中央町の河本商店】

昭和十年五月頃だったを思います。　小学生の私は母に連れられて河本様へ参りました。　中本町四丁目河本商店は、八幡の繁華街にあり、漬物、佃煮、食糧品卸をしておられ、おばあちゃん気質そのままの清潔なお店でした。　広い間口を入ると、全部が佃煮を入れるガラス張りで、塗物のケースが並び、横は色々な缶詰のウインドーでした。　私はいつも行くのが嬉しい。　モダンな河本のおばちゃん（当時の呼び方）に洋服が買って頂けるし、近くの川原さんの所では、着せ替え人形ごっこの端布が頂けるから…。　川原さんは御存知の通り教会にいらっしゃる川原さんの奥様。　河本様のご親戚で当時から呉服屋さんでした。　今でもはっきり記憶にあります。　母におばあちゃんは言っておられました。

「きぬよさん、この度、信仰に満ちた立派な先生が、救主イエス・キリスト様の集会をして下さるから来なさい」「今から前田に行くから一緒に連れて行こう」と言われ、母と私は八幡基督伝道館へ一緒に行く。　今度、集会をする前田町は、

元お醤油屋さんで、広い倉庫にはタンクが一杯、横は広い薄暗いお屋敷がありました。　そこに河本様は一年後に新築されて、中本町より移られる事にもなっていたのです。　今の河本様敷地全部で（付図二）、集会のお部屋は河本様玄関より門までの総二階の建物です（付図三）。　その二階二間八畳が伝道館となります。　河本おばあちゃんは、床の間に池の坊の花をいけられ準備をなさる。　床の間の横、書院を背にワインレッドの素晴らしいオルガン。　明くる日曜日、私共両親、祖母、弟で、重箱にお弁当を詰め、伝道館へ。　この時、私共は救いに与かりました。　玄関には新しい板に細長く〔基督伝道隊八幡伝道館〕と、墨で掲げてありました。　当時、私の家は八幡枝光裏田町三丁目、今の山王町にあり、寺町にある徳蓋寺の門徒、仏教信者でありました。

【伝道館の初めての礼拝・日曜学校】

折瀬鶴次郎先生が博多よりお出でになるので、礼拝は十時、日曜学校は午後一

時半位から。　朝の礼拝中は下のお座敷で子供ばかりで遊ぶ。　礼拝がすみました。　三家族がお弁当をつかいました。　高橋奥様がお茶を沸かして下さる。このお家には（伝道館の下）高橋さん一家が住んでおられたようです。　高橋京子ちゃん、英ちゃんの可愛い時です。　偉そうな事を言っても私も小学四年生位なのです。　河本様は中央町よりお通い、お昼の御食事、折瀧先生のお弁当は、河本おばあちゃんがお作りになって届けられ、伝道館で召し上がる。　槇本先生、野村先生交代でお出でになりました。

初めての日曜学校が始まる。　金言「はじめに神天地をつくりたまえり」。アダムとエバさんのお話を聞く。　紙に書いてある讃美歌、手をたたいて一生懸命に歌ったのです。　「主われを愛す　強ければ…」　楽しい日曜学校、後ろには父兄会のように大人が座る。　先生お立ちになってのお話。

日曜学校生徒、全員覚えている限り。

中央町より河本実様、河本信生様（二、三歳の可愛い時）、川原昭ちゃん、川原

安彦さん、川原節ちゃん（可愛い時）、新原マサルちゃん、新原節子ちゃん（三年生位、物凄い元気者です）、新原まあちゃん、河本様左隣の毛利下駄屋の正さん、右隣の洋品店島田の清ちゃん、大正町より槇本先生宅、先生のお隣の木屋めぐみちゃん、木屋きよしちゃん、長者町組は高橋京子ちゃん、高橋英雄さん、高橋悦ちゃん（後程に）、高橋よし子ちゃん（後程に）、長者町内から、中川アツちゃん（今は河本様、下前の方のお住い）、宮崎すみちゃん（今の河本様下隣）、高田のかつちゃん（今の槇本先生宅お庭の所）、ハツちゃん、マツちゃん、りつちゃん、枝光より藤本英子（私、畠山）、藤本一男（三十六歳で死亡しました）。

これだけが最初の日曜学校メンバーです。　楽しい日曜学校で一番印象深く残っているのは、ハツちゃん（と思うが？）マツちゃんかのどちらかです。　名前がどちらか？お母さんが若い方だったと思う。　母親の留守に決って、お化粧、口紅、ほほ紅は、おてもやんのようにつけ、木綿の膝までの着物にしごきの帯を締め、頭はおかっぱの所に赤い布切れのリボン、六歳位ですが、大変なおませさ

ん、先生が「ハツちゃん、きれいね」とおっしゃる、すまして座っているのが可愛かったです。

みんな二歳から十二歳位まで、前の方に横二、三列に目白押しに並んで座る。つつき合ういたずら盛りでしたが、金言をしっかりと覚え、次ぎの週には手をハイッと上げて、立ちあがって復唱いたしました。　紙芝居が一番嬉しい事でした。

初めてのクリスマス。　プレゼントが珍しく嬉しい。　クリスマス・ツリーも初めて見る。　二年目は八畳二間に、入り切れない様にどこからか、子供が来ました。　劇だけは何をしたか、第一回目はどうしても思いだせないのです。　槇本先生が来られて初めてのクリスマスには、もう八畳二間の会堂は一杯になり、後ろ入口の襖を外していたしました。　「はかり縄は我が為には楽しき地に落ちたり。　うべ我よきゆずりを得るかな、我は論しを授けたもうエホバを誉めまつらん」と言う所を何節か、随分長く暗唱しました。　劇は馬小屋のイエス様と、三人の博士でございました。

【第一回洗礼式】

第一回洗礼式がありました。　場所は河内貯水池、めがね橋を渡って右に入る。当時美しい小川が流れ、腰まである美しい水の場所。　折瀧先生。　介添は下川洋太様。受洗者は私の記憶の限りでは、河本小太郎様（先にうけられていたか？）河本久次郎様（河本おじいちゃんの兄）、高はし様、長尾様、河本実様（中学一年位）、新原御夫妻、新見奥様、木屋様、私の両親、祖母、私（小学五年生位）。

また、河本の店員さんの花田さん、森田さん、鳥ノ海さん、みな教会へおいでました。　（この方たちのバプテスマはちょっと覚えません）。

私の家は先に申しました仏教信者でしたが、この洗礼後すぐ仏壇、神棚を裏で焼き捨てました。　祖父は大反対でしたが、後に人にだまされて、父が保証人の印を押し倒産、後に祖父は救われて昭和十二年十一月天国へ召されました。

【河本久次郎さんの事】

河本おじいちゃんのお兄さんで河本久次郎という方が門司港より礼拝に出て、河本のおじいちゃんの横に座ってお話を聞いていました。　礼拝で並んでおられると良く似ていました。　この方がお救いに与かり、大変喜んで門司より礼拝に通いましたが、六人の子の中のたった一人の娘に死なれ、お酒を飲んだので胃を悪くしたのでしょう、癌に倒れました。　門司からでは遠いし、子供は男の子ばかりで、店はしているし（やはり漬物、佃煮商）養生も出来ないので、私の家が静かでしたから、来られて休んでいました。　夜になると河本おじいちゃん、おばあちゃんが枝光の私の家に来て、讃美歌を歌い、主のお話をして上げておられました。　ひどくなるばかりでした。　昔の事でしたから今のような病院はなく自宅療養が多かったのです。　私の家の掛かりつけのお医者さんに見て貰っていました。　折瀧先生も良くお出でになられましたが、とうとう駄目でした。　イエス様、イエス様と声が聞こえなくなるまで、主の御名を称えて亡くなりました。

ところが、後で、河本のおばあちゃんや、私の母にその奥さんが打ち明けた事

がありました。　「桜町の姉さんはね、『自分が死んだら必ず仏教でお葬式をしてくれと言いなさい』と、自分の主人に言う機会を門司から来る毎に狙っていたのだが、自分が言いたい時は、おじさんは痛が軽くてすやすやと眠っている。おじさんが目を覚ましている時は、自分が看病に来ているのにこっくりこっくり、眠くて仕方がない。　とうとう言わない内に死んでしまった、と言っていたよ」と。　河本のおばあちゃんから、久次郎おじさんの事が出ると私に話して下さいました。　折瀧先生によって、お葬式をしていただきました。　ちょうど五月でした。　小さいグリーンの十字架を木で作って（この十字架はこまめな、おじいさんのすぐ上の幸四郎おじさんが作りました）、緑の杉の葉っぱを巻いて、真中に白いバラの花を挿して、お棺の上にのせました。　おじさんは安らかに天に召され、いま、東郷の納骨堂に眠っています。　おばさんは、キリスト教に大反対の人でした。　このおばさんにはやがて、色々な事が起こります。　河本のおばあちゃんは、「神は侮るべきものにあらず、神に反対する者は無きが如くされる」

と言われました。　厳かなお言葉です。　「英子ちゃん、その通りになるよ」。おばあちゃんと、親戚の話しになると、この厳かなみ言葉が出ました。

【八幡基督伝道館会堂内】（付図三を参照）

八畳二間、まず向かって鹿児島本線の方に廊下、左が床の間と書院、違い棚、袋戸棚（少し聖書がいれてある）、書院の前にオルガン、先生のテーブルは黒塗りの軽く持ち運びが出来る物、カバーは麻の刺繍入り、白に水色の柄の水さしとコップ、いつも水さしにコップは用意してあるのですが、三先生方ともあまりおあがりにならなかった。　机の横に座布団を敷き、先生はお祈りになる時はお座りになる。　先生の机から一・五米ほど間をおいて皆さんの座布団を横五枚位、縦七枚位、計三十五から四十枚位敷いて座ります。　土曜日には、いつも池の坊の先生（お年寄り）がお出でになり、季節の花を見事にいけられる。　後ろの壁に貸出用の聖書、讃美歌の置く場所として、横二米、高さ一・三米、巾二十糎の

屏風の入った箱が立掛けてあり、その二十糎位の巾の上に聖書、讃美歌を置いてありました。本箱を置く場所が無かったのです。　その箱の中の屏風はご存じでしょうが、クリスチャンになられて酒類販売北九州一（九州一？）の成績だったのを中止されて、キリンビールか、サクラビールから贈られた物でした。　屏風は下のお座敷に立掛けてありました。　（第一回礼拝から一年位して会堂の後ろに新築されました）。

私はなぜこんなに会堂の事を覚えているかと申しますと、私は槇本先生をお迎えしてから後に三年間余り、早天祈禱会、水曜夜の集会、日曜礼拝、夜の伝道集会、など全部、お恵みで主の宮のお掃除をさせて頂いたからです。　河本おばあちゃんは常に私に言われました。　「英子ちゃんは主より愛されている事は人一倍。　神の宮のお掃除は普通なら出来ないのだが、感謝しなさいよ」と。　真にその通りでありました。　教会堂が空襲で焼けるまで続けさせて下さったのです。私がそのお役目をするまでは、高橋さん、長尾さんが交代でなさいました。

【榎本先生、着任される】

榎本先生が八幡基督伝道館に着任されました。　日曜学校は朝九時開校です。子供も少し大きくなりました。　でも日曜学校生徒は多少子供も入って来たようでしたが、顔ぶれは同じで和気あいあいの雰囲気でした。　日曜学校終了後、榎本先生は礼拝準備の為、河本様応接室で静まられます。　その間に長尾正博さんが座布団を敷きに一番にこられるのですが…、大変…。　日曜学校の終りの歌、「これでおしまい、かえりましょう、さよならしずかにして、またこのつぎまで」と歌う。　先生の姿が応接室に消えると同時に爆れだす。　座布団三十枚の投げやりっこです。　元気者の新原節ちゃんは座布団の箱の上から投げる、皆が跳び下りる、もう座布団は八畳二間にばらばら、長尾さんが準備に上がって来られて大目玉、大変叱られました。一ヶ月（三～四週の日曜）続きました。

【八幡前田教会日曜学校の第一回遠足その他の思い出】

槇本先生第一回の日曜学校遠足です。　行き先は三菱化成の横を流れる大きな川の土手。　前田教会日曜学校と紙に書いて竹の先につける。　河本実さんが旗をもって先頭に立つ。　最後尾は新原節ちゃんと私、河本信生ちゃん、川原節ちゃん、高橋悦ちゃんはお手々つないでリュックサック。　槇本先生は横についたり前に行かれたり、隊に気をつけられる。

槇本先生のスタイル。　ハンチング、ブレザー、ネクタイ、ゲートル（まだ軍服の時期ではありません。　平和な時です）というモダンスタイル。　腰に弁当をくくりつけておられました。　覚えています。　秋晴で今の河本の倉庫（工場）の前、働くおばちゃん達や、皆さんに送られて出発。　西前田（現前田町電停）より乗車、当時は折尾行き、黒崎車庫前終点と書いてありました。　黒崎車庫前下車。　二十人ばかりの楽しくのどかな遠足でした。

第二回目、皇ヶ崎公園。　第三回目、屋形船の下の方？　これで遠足は中止になります。　この第二回目の時に槇本先生は御結婚になりましたと思います。

百合子先生が第三回目の時はいらっしゃったようです。

日曜学校はオルガンを百合子先生から弾いて頂けるようになりました。　それまでは、どなたが弾かれたか、どうしても思いだせないのです。　昭和十五年三月、祖母が召天し、十二月父が腎臓病で召天いたしました。　ちょど槇本先生、百合子先生お二人で早天祈禱会がすみ、下の汽車線路の方を大正町へお帰りになる途中に父が危篤になり、すぐ高橋さんが先生を呼びに走って下さった。　河本のおじいちゃん、おばあちゃん、店の皆さんも集って下さいました。　先生ご夫妻が間に合って頂き、お祈りの中に天国へ召されました。　ちょうど、今の牧師館が戦前の河本さんの借家で、貸して頂いていました。　槇本先生着任されて、一番初めのお葬式をして頂きました。

大東亜戦争始まる！　先生のお宅は、俊雄ちゃん、和ちゃんが増えられ、俊雄ちゃんは、信生さん、英男さんの間にお座りして日曜学校生徒と共にお手々をたたかれて歌っていました。　色白でふっくらした愛らしい和ちゃんは、元気者の

新原節ちゃんが膝に抱っこして一人占めしていました。　皆（私も）抱っこしたいけど日曜学校が終わるまで他人に抱っこさせなかった。　でも、節ちゃんは和義先生を抱っこの一人占めして良かった。　私はこの年まで和義先生とお会い出来ますが、節ちゃんはその後十代の終り？に天国へ帰られたから…。

この事柄はちょっとお話が先になります。　和義先生の事でここに入れました。

和義先生の小さい頃の事を思いだします。　あるとき（終戦後）、新しい教会が建ち、河本さんの工場が活気づいていました頃、まだ信生さんが小学生で、私が台所で後片付けをしていました。　ハーモニカを持って、信生さん、俊雄ちゃん、高橋英雄さん、悦ちゃん、和ちゃんの五人の会話。　（私は見ていました）。

ハーモニカが止んで、信生さん「なぞなぞしよう、ハーモニカはなぜなるか？」和ちゃん「ピアノが入っているからです」。　笑い声。　信生さん「砂糖はなぜ甘いか？」、和ちゃん「ズルチンが入っているからです」、私は笑い声を出して

しまいました。　和義先生の四歳〜五歳の頃の事です。　非常に頓知のきく愉快な頭の良い和義先生の幼少の頃、俊雄さんは、ハハハと笑っていました。　和義先生の思い出も忘れられません。

【やがて私は河本様のお世話に】

私はやがて河本様のお世話になりました。　教会は黒と赤の合せに縫ったカーテンをかけ、電灯にも黒い覆いをかけ、夜の集会には光が漏れないようにしました。　この頃、私はちょっとした事に…考えれば、ばかげた事なのですが…少しノイローゼ気味で思い煩う事がありました。　ある時、おばあちゃんに「人間はなぜ、朝起きて一日同じ事を繰返し何になるのだろうか。　神様は世界と私をつくられたのだけれど、その前は何だったのかしら、変な事ばかり考えます」と言うと、おばあちゃんは「なにを馬鹿な事を考えるのね、家から出て外で働いてみなさい、そういう事を考える暇はない。　あんまりのんびりし過ぎるので、神様

に不届き千万な事を考えて、申し訳ないと思わんかね」と、大目玉を頂きました。
それでも私は何か不安になったり、馬鹿な事ばかりふっと考えたり、どうしようもない神経病にかかっていました。　ある水曜日の夕方、榎本先生の所へお使いに行きました。　冬の夜で、おまけに灯火管制下でした。　榎本先生は集会に来られるので、帰りはご一緒に長者町へ来る途中、緑町電停（現在の西門前）あたりは暗いけど、電車の明りなどはまだまだ良い頃でした。　先生は久留米絣に小倉袴で、聖書は風呂敷に包み片手で、例のハンチング帽をかぶっていました。
「先生、私は罪深くとても天国には、入れて頂けません。　立派な生活も出来ないし、何も出来ません。　主は捨てたもうたのではないでしょうか？」というと、先生は「神は独り子まで給い、主は御自分の命を英子さんのために捨てられて愛して下さっているのに、どうして捨て給いますでしょう、安心なさい」とおっしゃってくださいました。　しばらくして馬鹿なノイローゼはなおりました。
戦争も次第に激しくなるばかりで、夜の集会は先生と河本様、従業員のわずか

な人々で守りました。　光を外に出さないように、先生はお座りになり、中心に河本おじいちゃん、おばあちゃんがお座りになり、横に高橋さんが座っていました。　突然バタッーと物音がしました。　高橋さんの後の窓際に座っていた鳥ノ海さん（二十五、六歳）が、居眠りをして聖書を膝より取り落して、横にこけかかった音でした。　痺れを切らしたらしい。　私は居眠りの常習犯でしたが、その夜は違って、吹出してしまいました。　榎本先生はいつも正面から私の居眠りを御覧になって、せいがなくなっておられたのではないでしょうか。　河本様ご夫妻は、時間に遅れずきちんと、真前にお座りになって、榎本先生のお話をお聞きになっておられました。　そして、「英子ちゃん、近いのに教会に遅れたらつまらんよ、遠い所からでも来ておられるのだから。　近い事を感謝しなさい」と言われていました。　それでも私は滑込みセーフだった。　遠い所から教会に通う今になって思えば、あんなに教会に近く置いて頂いた事は感謝でした。

【不思議な神様のお守り】

食糧事情が難しく、芋、だんご汁、皆様ご存じの通りになった時、河本商店に漬物用の糠の配給が九十俵あり、糠は滅多にない。　当時は竹を引いた粉の中に、うきん粉を混ぜ、甘味にサッカリンかズルチンを混ぜ、大根を漬けるのです。他の漬物屋は二十俵以下だったと聞く。　糠を一度振いに掛け、小さい米などを除く。　従業員のおばちゃんたちが、二人向かいあわせで、糠ふるいをしました。上手な人で、直径三十糎位の振いに、二升の糠を入れて振ったところ、ザラーッと残ったのは小さい米はもちろんの事、白米が出るのでびっくり、多い時で五勺は出る。　当時のおばちゃんたちは、大変おもしろい方ばかりでした。中川さん、松山さん、月野さん、馬場さん、吉村さん、まだ他に、時々日出から若い応援団の娘さん達、多い時で五、六人来ていました。　賑かでした。　さて、お米が出たので、おばちゃん達は慌てておばあちゃんに報告。　もう漬物どころではない。皆で「糠振い」に専念。　でも本職は軍隊を控えた漬物、佃煮が仕事。　私が専

屬で糠振いに裏に行く。　白米一俵と小さい米が二俵位取れました。　取って置きのお米がなくなりかけて、どうしたものかと思っておられたおばあちゃんは、神様に感謝を捧げられて、従業員の方にも分けてあげられました。　万事がこのような主のみ業を与えられておられたのです。　私はこの事は、どんな時にも、どんな人にも、お証詞を致して止みません。　衣料統制もまた同じ。　あるとき、塩こんぶの乾燥の原料が、朝鮮より入荷。　送り主は知りませんが、宛名は違っていたようでしたが、戦時の輸送は乱れる。　でも原料の注文は河本様ですから、送って来たらしい。　土間に積んでありましたのを、開きました。　大きなかますに入っている。　こんぶと共に出てきたのは中心から、バレーボール大に巻いた白布地、かますより一個ずつ出てくる。　又々おばあちゃんは主に感謝、皆さんに分けて上げる事はいつもと同じ。　主は常におばあちゃんについておられた。

ある日、福間の広渡飴屋に、洋服生地をなにかと交換すると言うことで行かれる。　戦時中で夢のようです。　おばあちゃんはいかれた。　統制下であるが、

その物資は南方向け、日本占領地に与える洋服地、夏服地、日本人には手に入る筈なし。　従業員皆に分けてあげたいのがおばあちゃんです。　洋服地を三巻かもって、黒崎駅で下車、（いつもですが、そうでない日もあった）その日はあいにく調べ官が二人、闇米などを徹底して取り上げていたのです。　おばあちゃんは絶対絶命、前にも進めず、後ろにも引けない、観念する。　聖書のイスラエルが紅海を渡るのと同じ立場、主に祈られた。　腹を決める。　順々に自分の番が来る。　黒崎駅は乗下車が多かったそうです。　検問がおばあちゃんの一人前まで来ました時です。　突然その二人の係官がどこかへ消えたのです。　向うの方の上司に呼ばれたか、交替で立去ったのだそうです。　あとは皆様のご想像にお任せします。　おばあちゃんはその美しい洋服地を何着分か担いで帰られた。違反するものではないが、でも主に助けられた。　その御陰で私共、皆さん、店の人達、美しいブラウスや、ワンピースが着られました。

【どんな時でも身なりはきちんと】

どんな戦争中でも、綺麗にしたいのは世の常ですが、おばあちゃんは私の知る限り、服装、髪型、すべて乱れた事は全くありませんでした。　木綿のモンペをきちんと着ておられたが、外出する時、お正月、真黒の羽二重の、おじいちゃんの着物をモンペに、実にきちんとしておられる。　中本町にいる時、漬物屋だから、五時に店をあける。　漬物の朝漬け（床漬けの事）を買いに来るのです。必ず髪を結い、着物に帯をしめて店の戸をあける。　乱れ姿で戸をあけた事はない。　昔は夏でも着物着用です。　夏のゆかたの糊付けで袖山に折目がピシッと入ったのを必ず着る、そのような人です。　ある日、店の〇〇さんが、自分の娘さんに、質流れの（この当時はご存じのごとく着物を売る店がなく、質屋には和服がたくさん質流れとして売られていました）着物を多く買込んだとの事が、話しに出ていたのが、噂にたっていました。　〇〇さん「英子ちゃんは親がいないので、自分の家の娘の（質流れを買った）着物を一枚やりたいが、可愛いげがな

く、横着だからやらん」とある人が私に話して来る。　河本のおばあちゃんにその事を告げると、おばあちゃんは「ばかにしなさんな。　いらん世話を焼いてもらわん。　たとえ洗いざらしの木綿の着物を着ていようとも、質流れの古手などあんた（私）に着せん、と言いなさい」と、〇〇さんに怒っていました。　有難い事です。　やがて私が神様の恵みで呉服を商うとは、夢にも思いませんでした。

【質屋の安永さんのこと】（付図一参照）

今の槇本先生宅の前は、質屋の安永さんでした。　お金持ちでした。　そちらの奥さんは、おばあちゃんより年は上だが、どうもおばあちゃんの存在が気に掛かるらしい。　ある日、電話で、安永奥さん「奥様、お宅様の教会の明りが時々漏れていますよ」。　おばあちゃん「それはそれはありがとう。　気をつけます」と、それまではよかったが、安永奥さん「奥様、お宅のごみ取りの…」、おばあちゃん「それはそれはようこそ、よその事に気がつかれて…」、それっきりかか

らなかった。　安永奥さんにとって、おばあちゃんはライバルだったのです。

【この戦争は負けるよ】

夜、お風呂から上がると、私はおばあちゃんの肩もみ、とても私は上手で、誉められていた。　暗い電灯の下でコタツに入ったおばあちゃんは言われた。

「英子ちゃん、この戦争は、日本は必ず負けるよ」。　私はどきんとする。「それでは私達はどうなるのですか？」「そこが主エス様により頼んでいる者は大丈夫なんよ。　一番良いことをしてくださる」「どうして負ける事がお分りですか」

「アメリカは主を拝んでいる人の多いキリスト教の国、日本の指導者は違う。たとえ日本が勝っても、あのアメリカをどうして治める事が出来ようか…」。

日本が負けるとはやくから言っておられた。

とうとう第一回の空襲警報が、夜鳴りだしました。　大変大きな地響きの連続、おばあちゃんやみんな集って「今晩のは実弾射撃訓練だったのだろう」と、解除

になって言いあいましたら、長尾正博さんが黒崎にオートバイで漬物を配達して帰り、桃園町一帯は爆弾で全滅、西前田から下った桃園町電車線路は大穴、などと色々と悲惨な情報に初めて恐ろしさを味わい、川原さんのお宅でも枝光に第一回空襲を味わわれたそうです。　枝光と桃園町が日本で第一回目でした。　おばあちゃんと夜、話して間もない時でした。

先に申しました、教会のお花をいけに来られたお年寄りの先生、いつもあのお茶の時の茶色の帽子に和服、小さな信玄袋を手に、土曜日にはお出でになった方が、この時限り、お会い出来ませんでした。　荒生田の静かな所におられたのですが、めくら弾が落ち、ご一家直撃全滅されました。　河本のおばあちゃんは、大変この先生を尊敬しておられ、花いけが済むと、教会でお茶を差上げて、私もいけ方を見せて頂いていました。

【藤村先生に喜ばれる】

藤村壮七先生も古い教会の時、一度伝道集会をなさいました（付図三参照）。二階教会のお部屋から新しい廊下伝いに六畳の静かなお部屋で、集会が済むとお泊まりになる。　また、お昼食、夕食、みなおばあちゃんが、教会からお昼はおりられて、作られるのだが、見事なお料理、出来上がると私が給仕をいたします。秋ですから、鍋料理、先生は大変お好きで、全部召しあがる。　おばあちゃんを誉めておられて、お泊まりになる時は、好物の鍋料理をしました。　また、先生のお食事のお祈りの時は、私はおそばにいますが、主イエス様とまったくお話になるように、主が前にいらっしゃるようにお祈りをなさいました。　私は本当に感激致したものです。

【素晴らしい料理の腕前】

戦争は日一日と激しくなるばかり、毎日毎日陸軍病院、足立山高射砲、帆柱山などから軍隊が漬物佃煮を仕入れに来る。　青果市場の帰りに河本商店へ来るの

が、正午前後、十時半から二時までの間。　台所に兵隊さんが顔を出す。　飯盒に米を、人数により入れて「すみませんが、飯を炊いていただきたいのでありますが」と言う。　おばあちゃんはまったく心を尽くして人に奉仕をされるのです。実さんの兵隊に行かれている事も思っておられましたから。

早天祈禱会は六時に始まる。　先生は毎日降っても照っても、六時にはちゃんと来ておられる。八時半からポツポツ朝の片付けを済せ、大鍋に味噌汁を作る用意をする。　だんご汁です。　兵隊さんにサービスです。　兵隊さんの持ってくるのは玄米ですから、集めて白米にしておく。　多い日には二升釜に一杯御飯を炊くのです。　おかずは炊事班ですから、自分たちの食べる位は、野菜でも魚でも持って来ます。　各駐屯部隊毎にお昼を食堂で食べる。　煮付け、てんぷら、野菜の炊いたもの、なんでもおばあちゃんはその都度頭を働かせてスピードのおかずを作られる。　兵隊は、「戦前に戻ったようだ、またこのつぎに漬物を仕入れに来るのが楽しい」と大変な喜びよう。　寒い時も温かいだんご汁、味も最高。

美味しいおかず、一つのそつもなく、至れり尽くせりでサービスをされたのです。どんな人にも心が行き届いているのです。　何でも主から与えられた仕事と感謝されるのですから。

お客様もまた毎日来る。　いつも食事の客が不意にあります。　おじいちゃんが「かあちゃん、食事の用意三人分」とか、「かあちゃん、ちょっと鶏をしめてくれ」とか、急に申します。　普通なら、「不意にそんな事言っても…なぜ、前もって知らせんのかね」などと言うのが落ちですが、おばあちゃんは絶対に厭な顔はされない。　すぐ店の方に鶏をしめてもらう。　（私が飼っていました。）

東郷から来る農協の方は、鶏を下げて来る人がいる。　水炊き、フライ、その場で短時間に仕上げる。　季節に応じて見事に調理。　鶏のない時は、お庭の中の鯉をすくって鯉の丸あげ（本職顔負け、骨まで柔かにする）に野菜のあんかけ、夏は鯉のあらい、何でもこい。　三品、四品はすぐ考えつくのだからまったく驚く。　材料が豊富なら誰でもだけれど、少ない材料でも考えつく、まして戦争中

です。　鶏、鯉、さては兎の料理までやってのける、名コック長さんでした。

おばあちゃんは私に言われる。　「川原のやす子さん（川原奥様）と私（おばあちゃん自身の事）とで料理する、助手にキヌヨ（私の母）さん、桶屋の大西のお嫁さん（教会の前、元大西桶屋の前の奥さんで、広島の同郷の人）、これだけおれば、四十人、五十人の料理は板場はいらん」といわれていました。　長年おそばにいたのに、私はすったりだめで、「この子は器用にない」と言われる。実にその通り、おばあちゃんはすべて目分量で行くのですが、スープ等でも、最後、三十人分の皿にピシャリといくのです。　自分でも驚かれているのですから。お庭（の池）には、戦時中、お魚がないので、黒い鯉を飼って、料理に使っていました。

【すべてを教えて下さるお師匠さん】

お裁縫は、モンペからすべておばあちゃんが先生です。　夜教えていただくの

ですが、元来私はお裁縫は不器用、あまり好きでない。　「なかなか棟があがらんなあ（出来上がらないと言う意味）」と言われていました。　とにかくお茶、お花（東郷に避難した記事の中にも、お花の事があります）、お裁縫、お料理（前出）は勿論、なんでも教えて下さる素晴らしい私のお師匠さんでありました。

【鶏の飼い方一つにも心を尽くして】

前にも書きましたが、鶏を私が飼っていました、などと言ってもこの事についても一言。　おばあちゃんがなんでも心を込めてされるのは、前にも申しましたが、「英子ちゃん、鶏に餌をやったね」と聞かれます。　私は他の事でうっかりざくざく菜っぱを切る。　糠をくりくりと混ぜ、魚の粉を入れてやる。　鶏は残して、いつも前のが一杯残っているものだから、時々ずぼらをしてやらない。おばあちゃんは言われる。　「鶏も餌をやりさいすればよいと言うのではない。美味しくやらなければ…」と言われて、菜っぱの切り方、糠の混ぜ方、鶏が食欲

を増すような餌の与え方など…鶏にも心を尽くしていられるのが、今でも目に浮かぶ。　万事この通りのお方でした。

【狐に化かされてたまるか】

でも面白い事も言われる。　私が夜、倉庫の奥に用事があって行かなければならない時がある。　ご存じのように奥は広く、当時の電球は夜でも暗い。　恐ろしいから嫌ですと言うときに「何という臆病者かね。　私は娘の時に岩国の多田で、向うの村にお使いに行かされていたよ。　お姉さんは非常に優しい人で、夕方からは外に出ないから、（下川の）おばあさんは私にお使いを申付ける。　八幡様の森の下を通る時は必ず狐が出る。　上の方からコーンと石を下に向かって蹴る。　このとき、気の弱い人間は化かされる。　私はこの外道め（この言葉は広島、山口の方言）お前どもに化かされてたまるか、と一声出して度胸を据えて歩くのよ」と。　若い時から気丈なおばあちゃんは絶対に気の強い方でした。

【いよいよ戦局が悪化する中で】

いよいよ戦争の情勢も悪化、各地で空襲警報は鳴り、夜の空を真赤に焼夷弾で都市が焼けます。　実さん、高橋さん、長尾さん、花田さん、すべて召集で出てしまわれ、残る男性はお年の木屋さんと鳥の海さんだけ。　鳥の海さんは前にお話しした、聖書を膝から落した人です。　博多人形作りだったのですが、痩せこけて、骨と皮位になって河本に就職したのです。　どなたかのお世話だったのですが、河本商店に来ると元気になる。　それは塩分をあたるからだそうで、もうこの頃はガッチリとした立派な青年（？）でした。　でも目が片方悪く、片足もちょっとびっこをひいていたので、口の悪い松山さんや月野さん（その他の女の人、従業員のおばさん）たちは、「とんのみさんが、兵隊に取られたら日本も終りやで」と冗談を飛ばし、本人も内心では安心？　ところが来ました、赤紙が！　丙種合格、あとで聞けば、鉄砲もなくて、腰の短剣も木を下げていたとか。　そのように日本も終りだったのでしょう。　もう河本商店には、男性の働く人は、

木屋さん一人。　おじいちゃん、信生さん、あとは皆女性。

【折瀧先生が群馬へ引き揚げ】

昭和二十年六月六日。　折瀧先生のご家族が博多の空襲にあわれ、群馬県へ引きあげられるので、子供さん五人、先生共六人で八幡へお立寄りになる。　三日間位だったでしょうが、おばあちゃんは朝昼晩ありったけの米を炊いてもてなしました。　食べ盛りの子供さんです。　小さいお嬢ちゃんも連れておられ、奥様はお亡くなりになった後ですから、一入不憫に思われたのです。　おかゆなど一度も炊いていません。　取って置きの餅米でおはぎも作る。　そしてお発ちになりましたが、やはりお米がなくなっていく。　米の補給はままならず、ヒヤヒヤしたとは言われましたが、常に主に祈られる方です。　いつかの米の糠の中から出た時の恵みの信仰を持っておられたので、人間の気持ちとしては本当の事を私に打ち明けられたのですが、すぐ感謝して祈られます。

【八月八日の八幡大空襲】

八月八日、早天祈禱がすみ、槇本先生がお帰りになって、食事をします。　店の人達が出勤しておいでになる。　例のごとく味噌汁のだしを出しながら、あと片付けをしていました時、不意に朝から空襲警報、たちまち爆弾の音、頭の上のものが落ちる。　「英子ちゃん、今日は危ない。　早く用意！」　お座敷の方のガラス戸は全部壊れてしまう。　バケツ送水リレーなどとてもだめ、教会の下の事務所に、町内の人がなだれ込んで来たのを覚えています。　隣組長のおじいちゃんの指示で、町内会は鹿児島本線の線路の中へ逃げました。　「英子ちゃん、床の間のハンドバックをもって来るのを忘れたかね」。　中には一本のダイヤの指輪に、お金など入っていまして、「空襲で逃げる時は、必ず私が引受けます」と、大きな事を言った私ですが、いざ空襲に直面したとたん、だめ人間になってしまい、命からがら自分の事ばかり。　国に供出せずに残しておいた貴金属の中の、たった一本、いつも大切にはめておられたダイヤの指輪です。　大変惜しま

れましたが、「やっぱり私には必要ないだろう」と言われました。　小学生の信生さんに薄い布団を被せられて、高橋さんのご家族の子供さんの名前を全部呼ばれ、揃ったところで、長者町の人達はみんな、下の製鉄所の方へ、逃れました。実に落着かれたおばあちゃんでした。

後程分りましたが、あの空襲の中、煙はどんどん迫る中に、重い鉄板で蓋をして、四斗樽の砂を被せて、（今の河本様応接間、即ち当時の教会の下の）防空壕を密閉した、おばあちゃんの冷静な頭と心と行動力に、まったく頭が上がりません。　いつその様な行動をされたのか、ただ恐れ回っている私には分りませんでした。　主を信じ、寄り頼んでおられた信仰の以外の何ものでもないと思います。他の女の人は絶対に出来ません。

煙に包まれだした長者町、向うは燃える火の海でしたが、河本おじいちゃんはこちらへ一人で来ておられる。　近づいて言われるには「悪い靴しか履いていなかったので、取りに帰った。　教会はまだ焼けていなかった」。　何と言う落ち

ついた肝の太さ！　びっくり！

雨のごとく降った焼夷弾、機銃掃射がどの位続いたか、生きた気はしなかった私ですが、解除になって皆喜び感謝をいたしました。　長者町一丁目町内会負傷者なし。　死亡なしで、神様は教会のある長者町一丁目を祝されたのではないでしょうか。　また、隣組長のおじいちゃんの指示に従った町内会も幸いでした。ちょうど河本さんの工場の前にしょうが漬を取りに来ていた馬車の兵隊さん、馬を荷台からすぐ外して逃がしたそうですがどうなりましたやら、分りません。長者町を恵まれた主の事ーーー高田の勝ちゃんのおばさんがいました。　今の槇本先生の御宅の表通り側お庭に家がありました。　河本奥様と言っていました人ですが、足が立たなくなって、ちょうど戦前の河本さんのお座敷の裏にある長屋に住んでおられました。　空襲と同時に足が立って、同じ汽車道へ逃げました。戦後祇園町で勝ちゃん達と魚屋さんをしました。　去年おばあちゃんの元気な時、このお話をしたのを思いだします。

【八枚着て逃げた私】（付図一参照）

もう一つ、私の事。　命からがら私が、汽車線路の土手に屈んで難を逃れる前に、今の復興道路は町内のカボチャ畑で、葉が一面に繁っていました。　私はそのカボチャの葉の陰に隠れるといってへたばり込んだそうです。　その上、どこでどう着たのでしょうか、あの真夏の暑いのにモンペ三枚、上着三枚、ワンピース二枚、合計八枚も、私は着て逃げ出したのです。　おばあちゃんは、戦争の話をされる毎に、高田のカッチャンのおばさんと、私のカボチャの葉の影の事、避難する時、着て出たモンペの数、笑い話にされます。　おかげで、戦後私に着る物をしばらく作らなくてすんだといわれました。

【東の防空壕について】（付図一、二参照）

東の防空壕についてお話します。　漬物タンクで五部屋出来ました。　おばあちゃんは、もし空襲で家が焼けても、食糧品、布団類、衣類、襖、障子、すべて

を中へ入れて、榎本先生ご家族、高橋さん、木屋さん、皆なんとかこの中で暮らされる、と言われて、おばあちゃんと私とで、毎日暇を見ては物資を入れていたのですが、天井の空気孔を塞ぐのを忘れ、ついに火が入った。　三日間位燻って焼けていました。　後で掘りにいきましたが、まったくだめでした。　教会の下の防空壕、おばあちゃんの手で蓋をした防空壕は無事で大変喜ばれ感謝をされました。　この防空壕は汲んでも汲んでも水がたまるのです。　ひざ位まで。　食糧品を棚を作って並べる。　濡てよいのは下に置く。

『ぶどうの木十五号』の「牧師館訪問記五」の、戦災後の百合子先生のお話の、「でも、水飴や砂糖とかいくらか出て来て、それを戴いたり…」とおっしゃっておられるのはこの防空壕から出て来たものです。　水飴などはしばらくして蓋を開けたのですが、煮えていました。　毎日水を汲み出すのが大変で困ったのですが、　主はご存じでした、先の事を。　水があるために、あの大きな教会の二階が焼け落ちても、水の調節で、おばあちゃんの塞いだ食糧の壕は助かりました。

主は先の先までご存じ、分らないのは私達人間でした。　感謝されたのは言うまでもありません。

【自分にはつつましく人には惜しまず】

もう一つ申し上げたい事。　折瀧先生ご一家に惜しげもなく、お腹一杯食べさせてあげたおばあちゃんでしたが、二ヶ月後には丸焼け、けちって振舞わなくても、結局お米は灰と化していました。　また、このことにおいても、天に宝を積まれたのではないでしょうか？　でも出すべき時は出す、倹約する時はする。これがおばあちゃんの気性、私はいつもこう教えられました。　「人に対してはけちるな。　自分の事にはけちってよい」と言われ、石鹸でも残りくずは、新しく出す石鹸に柔かいうちにつけてしまう、そして屑もみな使える」と。　「英子ちゃん、私の下駄を履きなさんな。　せっかく履き馴れたら、履き心地が良いのですぐあんたは私のを履く、そして蹴り割る。　足に鎖をつけている様に荒いか

らなあ」と言われるのです。　下駄でも静かに履かれて、なるべく石のある所は歩かない。　草の上を歩く、と言われていました。　その通り、ぺちゃんこになっても割れないで履かれるのです。　自分の持ち物は非常に大事にされ、人の為には惜しげもなく振舞われました。

【東郷に避難して終戦、やがて教会の新築】

東郷に一時避難されるのに、私もお供させて頂く。　東郷の生活も、今の納骨堂の所はまったく山の中、熊笹が背丈までありましたが、（私は一人この中で迷ってしまいました）薪を取りにいく。　下川様のお庭で、くどをついて小さい煙突をつけ、楽しくモンペばきで、煮物をされる。　鍋は鉄鍋を下川さんから借りる。　常に喜んで、その時精一杯作られるのです。　日本が終戦になり、すべて動揺した時です。　下川さんの前を、「米軍や占領軍が入って来る」と言って、リヤカーで荷物をもって逃げる人、流言蜚語が飛びかう中で、「絶対にそう言う

事はない」と、一人で否定され、ゆっくりとしておられました。　下川さんは私がお世話になっている時、大変親切にしてくださいました。　皆様が復員されて来られました。　神様はこのひどい戦いの中に全部守られたのです。　下川さん、実さん、お帰りになりました。　東郷に槇本先生、百合子先生ご一家がお見えになりました。　ご無事だったのです。　咲子ちゃんが赤ちゃんでした。

東郷下川様宅で終戦後初めてのお正月を迎えました。　八幡にいる時は、あの亡くなられた池の坊の先生が来られて、見事な松竹梅を床の間にいけられまして、先生が来られなくなってからは、おばあちゃんが全部いけられました。　が、東郷では花がない。　あの納骨堂が建っている山へ、木を切りにお供をしました。いろいろなものを集めて来られて、水盤に盛花をされた。　盛花と言っても花はありませんでした。　一見箱庭風、庭園風にいけられ、今でも思いだすのは、十糎位の万両の赤い実の付いた木をあしらわれて、見事ないけ方、頭が良いのです、おばあちゃんは！なんでもお出来になる。　下川のおばあ様が言われました。

「勝さんは上手だね」。　そのお言葉は今でも覚えています。　ある冬の寒い日、下川様宅前は低い田んぼでした。そこに三十糎位の見事な芹の群生ーー誰も植えたのではないのにーー「神様はここでも野菜を備えて養いたもう」と感謝されました。

東郷で暮らさせて頂いている時、八幡からの使いで、長者町に、漬物、味噌が土に埋っているのがあると言って、リュックサックで戸畑方面から、夜になると取りに来ていると言う事で、八幡に日出から材木をお買いになって、焼け跡に一番に新築されました。　八幡に移りまして、実さんが「珍しい人を拾って来た」と言われる。　野村先生だったのです。　皆様ご存じと思います。　主は野村先生も八幡の地にお呼びになりました。　河本様、新築の家に槇本先生を再びお迎えして、主を礼拝させて頂きました。　そして焼跡に、河本様ご夫妻により、八幡前田教会が立派に建てられました。

【榎本先生の贈物】

曽根の地に来ましてから、だんだんと生活や子育ての忙しさに追われて、教会にも行けず神様を離れたような時がありました。　ある晴天の日、オートバイで来られた人がありました。　榎本先生でした。　びっくりいたしましたどうしてこなに遠方に訪ねて来られたのでしょう。　「あまり英子ちゃんの姿が見えないので、どうしているかと心配になって来ました」とおっしゃられました。　家も小さく狭くて、お茶も差しあげられなかたが、先生は私の無事な姿を見てお帰りになりました。　私は有難いやら、申し訳ないやらで、いまだにその先生のお姿が私の頭に残っています。　それから三年経って…。　結婚当時、畠山の勤める印刷会社は非常に良かったのですが、大阪から大量の印刷が北九州に入り、不況となりました。　とても暮らしていけなくなり、当時、印刷を受けていた、大門の二神本店に就職し、畠山は外交に出ました。　まず、曽根地区から知合いを頼って売りに出ました。　自転車に衣料を積み走り回るわけですが、当時ゴルフが

盛んになり始めの頃で曽根は小倉カントリー倶楽部と門司松ヶ江ゴルフ場へ行く道の分岐点で会社重役がハイヤーでゴルフ場へ走っていました。　その後を畠山が自転車でいくので、まだ道路もアスファルトでなく、砂ほこりを頭から浴びせかけられていました。　「この人たちにほこりをあびせられて品物を売って回る、何とおちぶれた事か！」と大抵負けん気の強いのに悔やみました。　私は先生に祈って頂きました。　「榎本先生、畠山はこのように申します、落ちぶれたものだと」。　「畠山さんを力づけなさい。　ゴルフへ行くハイヤー族は会社のお金で遊んでいます。　畠山さんは自転車でも一国一城の主、自分がやっているのです。　頑張りなさい」という榎本先生の励ましのお言葉に力づけられ、主に祝福されました。

【私達で仕事を始める】

品物を売らせて貰っていた二神本店が倒産し、頼りにしていた品物の出所はな

くなりましたが、得意先はだんだん出来て来ました。　私達は自分で商売をしたいのですが、資本金がありません。　「必ずお返し出来るめどがつきましたのでお貸しください」と、河本おばあちゃんに畠山と二人で頼みに行きました。　おばあちゃんは「お金は貸しません。　貸すと払えなくなった時、英子ちゃんは苦しむようになる。　絶対払えると言っても人間はどうなるか分らない。　その時には、家に来られなくなるから、お金は貸さない」と言われ、「神様に祈って、主に戴きなさい。　そしたら、返さなくてすむのだから。　祈って上げる」と言われ、その時はがっかりして、畠山と子供を三人抱えてすごすご帰りました。

それから祈り、おばあちゃんの言われた通りに主が与えて下さいました、資本金を！　今まで二神の集金をしては二神を買収した紺屋町の長井本店に届けて、五分の報酬でしたが、次ぎの品物を売らせてくれないので、集金しては持っていくばかりでした。　「長井さん、私どもは集金だけではやって行けません。　品物を出してくれなければ」と言っても信用して品物を出してくれません。　「お宅

で勝手に残りをしてください」と言い、カードを置いて帰りました。　長井本店は自分の家の店員を使い、私達の渡した集金カードをもって廻りましたが、一円のお金も集めきりませんでした。　私共は得意先に、もう集金はしません、長井に払ってください、と申して来ました。　私共のお得意さんは長井さんは知らない、と言って払わなかったのです。　長井社長は「畠山さん、残りのお金は、あんたに上げます」と、私共はおばあちゃんが言われた通り、主が資本金を返済なしで貸して下さったのでした。　おばあちゃんは真に先の事が神様によって分る方でした。　畠山と結婚する時、おばあちゃんは「英子ちゃんの人生の占いは私がして上げる。　あんたは案外長生きをするだろう。　そして、穏やかな老後を送る事になると思う。　ただし、主イエス様を離れてはあんたは駄目になる事は間違いない」との言葉を私に贈って下さり、「英子ちゃんは、畠山家を主の救いに導くために曽根につかわされる事を忘れなさんな」と言われました。　実は、畠山のおじいさんは神道でしたが、キリスト教には反対せず、日曜学校には行か

せていました。

【あの時のお言葉通りに】

あの燈火管制の暗い中、緑町で榎本先生が教えて下さった通りに、私のような者を今までお捨てにならず、こんな大役をさせていただきました。　元来物覚えが悪い私ですが、主のお恵みで、当時の事が次々と思いだされました。　質屋の奥さんの事まで飛びだしてきました。　思えば昭和十年八幡前田の地に初めて伝道館が出来、日曜学校に出させて頂いてから五十年たち、榎本先生を中心に八幡前田教会は祝福され、赤ちゃんだった和義先生を立てさせ給い、伊規須先生のもと戸畑教会の第一学年に私は入学させて下さいました。

今、懐かしい戦前の思い出を、感謝と共に記させて頂きました。　まだまだ書きたりない事ばかりです。　私には小さい時から、色々な運命がありました。毎朝、外へ出て空を見て、主の祈りをさせて頂きますが、そばでおばあちゃんが

「英子ちゃん、神様を離れたらだめよ。　神の言葉に従いて幸いを得よ」と、いつも言って下さるようです。

【河本様の出身地】

河本家は、広島県、江田島の横、似の島の大地主で、今でも総本家があります。分家河本家は宇品に出ましたので、そこにお墓がありました。

「汝ら世にありては悩みあり、されど雄々しかれ。　我すでに世に勝てり」

ヨハネによる福音書十六章三十三節

右のお言葉は私の最も好きなものです。

以上（一九八六年六月記）

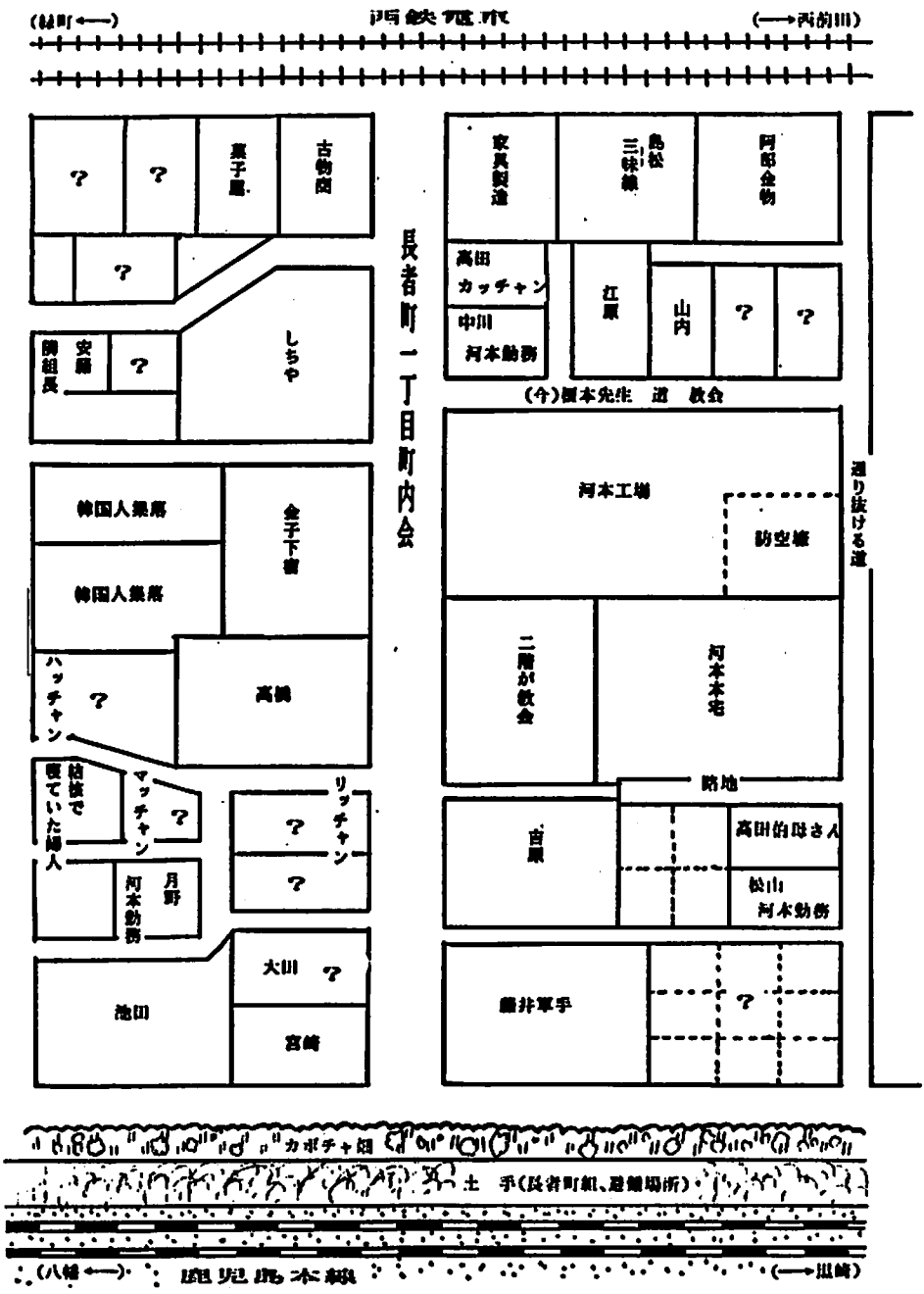
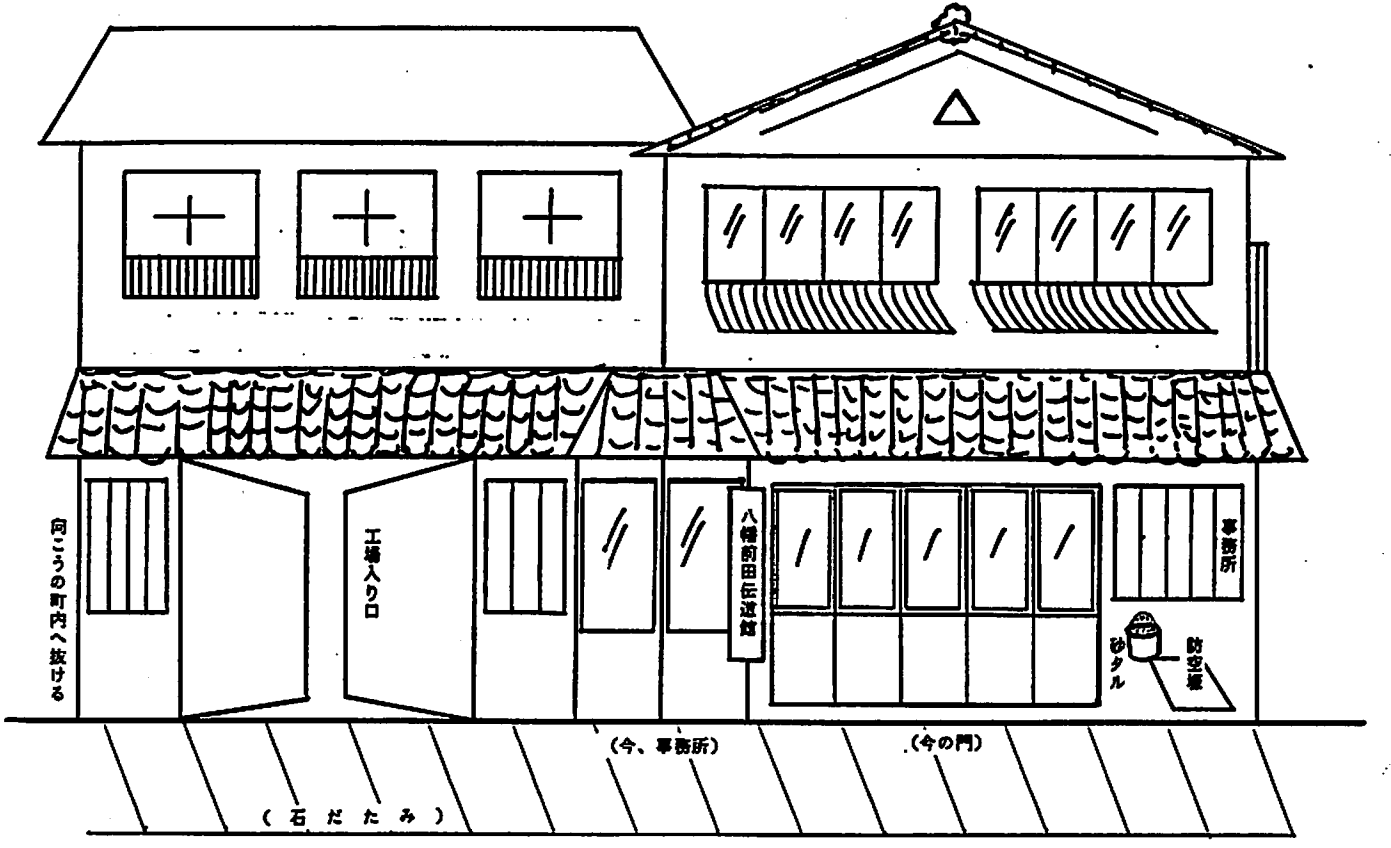

(結町←)
西鉄電車
(→西鹿田)
?
?
菓子屋
古物商
?
しちや
安藤
隣組長
?
長者町一丁目町内会
韓国人集落
金子下宿
韓国人集落
ハッチャン
?
高橋
結核で寝ていた婦人
マッチャン
?
リッチャン
?
?
月野
河本動物
池田
大田
?
宮崎
家具製造
島松三味線
阿部金物
高田カッチャン
中川
河本動物
江原
山内
?
?
(今)福本先生 道 教会
河本工場
防空壕
通り抜ける道
二階が教会
河本本宅
路地
吉原
高田的母さん
松山
河本動物
藤井軍手
?
カボチャ畑
土 手(長者町組、避難場所)
(八幡←)
鹿児島本線
(→出崎)

図 1

図 2



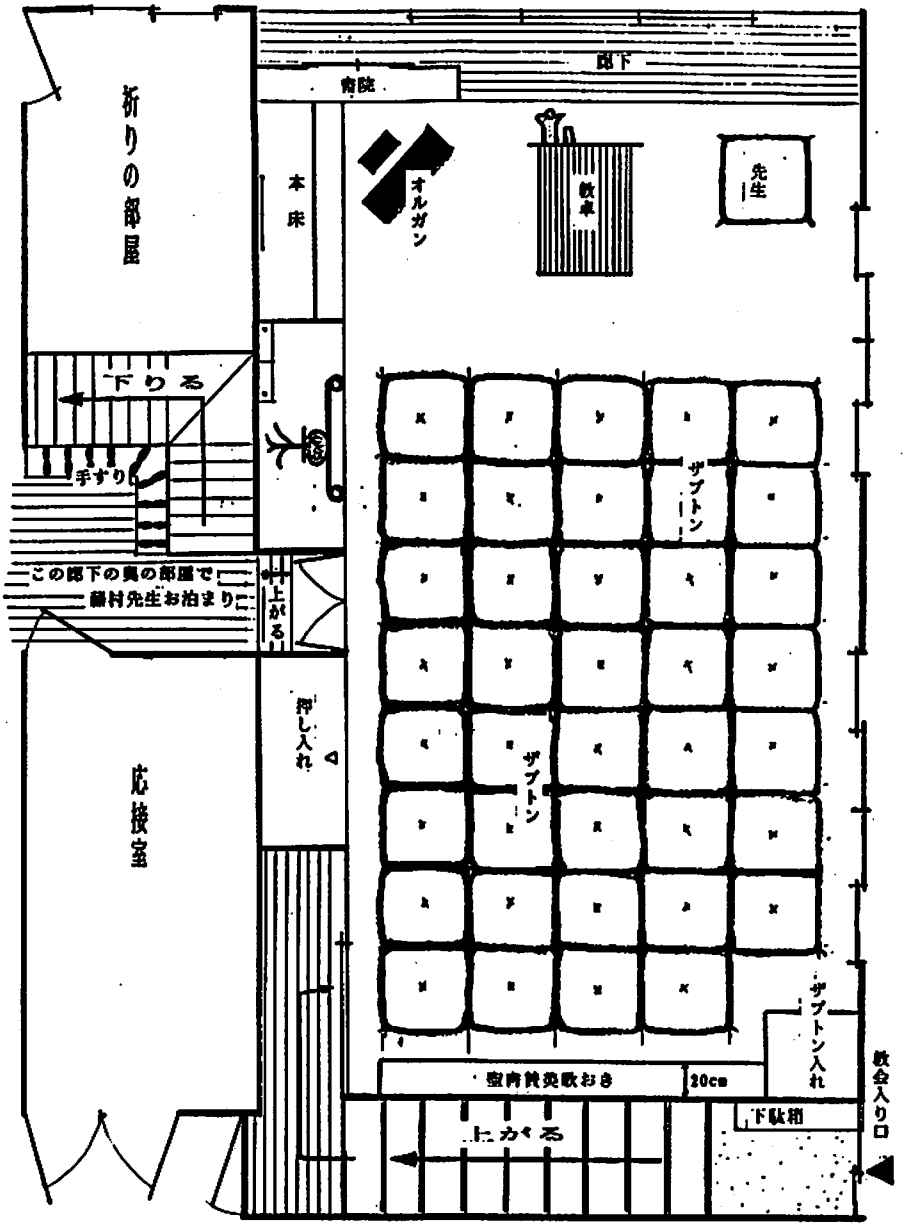

祈りの部屋
廊下
南院
本床
オルガン
教卓
先生
下りる
手すり
この廊下の奥の部屋で
藤村先生お泊まり
上がる
押し入れ
ザブトン
ザブトン
応接室
ザブトン入れ
聖南賛歌おき
20cm
下駄箱
上がる
教会入り口

図 3

河本のおばあちゃんの思い出

池田　操

河本のおばあちゃんは私にとっては、忘れる事の出来ない存在でした。　御主人様と奥様の信仰によって教会が建てられ、陰の力となって支えられた偉大な方です。　私が教会へ近づかせて頂いたのは神様の導きでありますが、お二人の働きがあったからだと思います。　求道中の頃ですが、朝の早天祈禱会は御主人様と一緒に前のベンチに腰掛けておられました。　各集会にも、御主人の亡き後も足の続く限り、教会へおばあちゃんは心から神様を信じて、従って、疑わない方でした。　私が暫く教会を離れておりました時も、久し振りに礼拝に出させていただいて、「また来ました」と報告しましたら、ウンウンと頷かれて「よかったね、神様を離れては魂に喜びがこないでしょう。　神様を信じなさい」といわれ

て、涙の出る思いが致しました。　第一回目の手術前、紅梅町にお見舞いに見えて、このお言葉をもって祈ってくださいました。　「神はわれらの避け所、また力である。　悩める時のいと近き助けである」詩篇四十六篇でした。　私も何度か若い時から、お伺いして大変お世話になり、また、勉強にもなりました。　おばあちゃんの入院前伺って、お話の中で、神様は生きておられるのだから、祈れば答えてくださる、自分もいろいろな戦いの中を通っては主の恵みを受けて解決しました、と申されました。　人情深い人柄が偲ばれます。　同時に、責任感の強い方だと思いました。　私にとって最後の別れになるとは夢にも思いませんでした。　若奥様のお話の中で、神様が癒してくださる、とすべて主に委ねられていたとお聞きしました。　おばあちゃんが多くの信仰の実を結ばれた様に、私も信仰をもって歩ませて頂きたいと思います。

河本カツ姉の思い出

野村　末義

「わたしたちは、さらに彼により、いま立っている恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。　それだけではなく、患難をも喜んでいる。　なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである」。（ローマ五・二～四）

河本のおばあちゃん（カツ姉は、みんなのおばあちゃんだったので、そのように呼ぶ）が召されて、八月が来たら満一年になろうとしていますが、その信仰のご生涯が、今日も鮮かに物語っておられる事を思出します。　その御生前お元気

な時に、先の聖言を、「子供たちのために残して置きたいから、是非これを書いて額に入れてください」と、私に頼まれました。　私は、よほど、おばあちゃんのお気に入りのお言葉だと思い、お祈りをして書かして貰いました。　余りかんばしい出来ではなかったけれど、め桑の木の額に入れましたら、大変喜ばれて、「もうこれで、何時天国に行っても良いようになりました」といわれて、その時にいわれた事が忘れられません。

「この聖言は、結婚して嫁に来る時に、牧師先生から与えられたもので、『いかなる人生の岐路においても、主の愛により、忍耐していく時には、必ず勝利が与えられます』と教えられて、それが今日まで、私の信仰の基となってこの年まできましたから、記念の聖言ですよ」といわれました。　なるほど、うべなる哉！おばあちゃんの堅い信仰が、ここにスタートして、本当に結婚当初からの戦いの連続の中で、ご主人を助け、たくさんの若い方を使っての事業にも、また、あの戦中戦後の非常に苦しい困難の中にも、信仰を捨てず、祈り続けて来られたのは、

大いにこの聖言によってであった事を知りました。

「神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは忍耐である」（ヘブル十・三十六）とありますが、主からの大いなる恵みを受けるために忍耐が必要だと知り、これがおばあちゃんが、信仰生活五十有余年の間、忠実に聖言に従い仕えられたその生涯によって証詞してくださってる通りでした。主の僕としての御生涯でした。

私も十三年間お店において頂いてお世話になりましたが、実に、肉親も及ばぬ程の愛をもって、失敗だらけの迷惑ばかり掛けた申し訳のない私を本当に主の愛に満たされて、只黙々と忍耐をもって祈ってくださいましたことが、よくよく分りました。　細かいお心遣いをして、懇ろに取扱ってくださったのも、只々、主にあるゆえに、どこまでも聖言にしたがって神を敬い、主イエスのご愛と忍耐とが、おばあちゃんの魂の中に満ちていた事の証拠でした。

「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある」（ヨハネ黙示録十三・十）。　卑

しい僕も、おばあちゃんのご生涯のように、主の前に、患難と思う時も喜んで、信仰と忍耐とをもって全うし、大いなる報いを頂き、喜ばれる者になりたいと願っております。

おばあちゃんのご召天一年に当たり、その信仰と忍耐の歩みによって深く教えられ、感謝をもって主を崇め奉ります。

（昭和六十一・四・十）

彼らの生活の最後を見て　（ヘブル十三・七）

岩隈　多賀子

河本カツ姉は、私が八幡前田教会にお世話になる当初から大きなかかわりのある存在でした。　と申しますのは、私が八幡前田教会の礼拝に初めて出席した場所が河本家のお座敷だったからです。　それはまだ信者とは名のみの私の教会生活の始まりでもありました。

あれから四十年の月日が流れていたとは夢のような気がいたします。　間もなく隣に会堂が出来上がってからも、度々お宅へお邪魔いたしました。　御長男の実兄が教会の青年会のリーダーでいらっしゃいましたから、聖歌隊の練習やクリスマス劇の御指導を受けたりしているうちに個人的な相談に乗っていただくことも多くなり、タイプライターの練習やアルバイトのためにお宅にばかりでなく、

漬物工場や事務所へもお伺いしたものです。　御主人の小太郎兄もカツ姉も一度として嫌な顔をされたことはなく、いつも優しい（慈しむような）笑顔で「いらっしゃい」と声を掛けてくださいました。　世間知らずの私は、お仕事の邪魔をしていることも気付かずに、気ままに御好意に甘えていたのです。

印象的だったのは、御夫妻とも身仕舞いを常にきちんとされていたことです。ことに、カツ姉はお家の中でも髪ひとすじ乱しておられず、和服をきりりと召されていました。　教会での座席が決っていたことは皆様のご存じの通りですが、遅刻して来られるお姿を見た事がありません。　お年を召されてからのカツ姉は前の晩から水分を取ることを控えられ、集会の途中でトイレに立たないように心がけておられたそうです。　御自宅で礼拝を守られるようになってからも、時間にはきちんと席についておられ、起立すべき時には立ち上がり、その御様子は教会での姿勢と少しもお変りなかったと漏れ聞いております。

八幡前田教会が現在の新会堂になるまでの間には、私の人生にも二転、三転の

変化がありましたが、昭和五十四年の春に父が召されてからは、まったく自由に各集会に出席出来るようになりました。　宗像から車で参りますから、集会中は道路に駐車しておきます。　時には駐車する場所が無くて困っていますと、その都度、河本の若御夫妻が助けてくださって、お店の倉庫の中にいれて下さいました。身に余るご親切を不思議に感じながらも感謝で一杯でした。　ある日、私用でお宅にお訪ねしますと、「是非おばあちゃんの部屋まで上がってください」と招かれまして、茶菓のみならず夕食まで御馳走になり、四方山の話に花が咲きました。　「いつもあんたの車に悪戯されないようにこの窓から見張っていて上げるよ。　今日はまだ車が見えないが、やすんだのかな、まだ車が在るが、こんな時間まで教会にいるのかなと、ここから見ているのだよ」「ありがとうございます。　それで私が車のところでごそごそしていると、おばあちゃんの声が上から降って来たのですね」。楽しく笑いながら、私は独り、カツ姉の愛と祈りが陰にあったことを悟りました。

思えば、カツ姉からいろいろと誉めて頂きました。　やる気を起こす力も頂きました。　なかなか上達しないオルガンの練習を投げないで、いまだに続けておりますのも、肉体の健康のために具体的に祈り始めましたのも、老姉の御陰でした。　「信じて祈れば必ず神様は聞いて下さる」。　長い人生を経て来られた方の証詞には力がありました。　ところが、お元気だった老姉が突然、身体の自由を奪われ、病苦に悩まされるようになりました。　「寝たきり老人になって、家族に迷惑をかけることだけはしたくない。　召されるまで自分のことは自分でできますようにと毎日祈っておられたのに、これは一体、どういうことなのでしょうか」と、ご回復を切に祈りながら、神様のお応えをひたすら待っておりました。

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起こしなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい」。　神様の定めに対するその従順さ、その潔さに、息子である信生兄も嫁である米子姉も共々に驚いておられました。　信仰によって、最後まで雄々しく、明るく、苦痛の中を立派に戦い

抜かれた御様子を聞かせて頂きました。

心にかかりながら、入院中のカツ姉をお見舞いすることはついに出来ませんでした。　私が老姉にお目にかかったのは、御自宅に帰ってこられた前夜式の時でした。　自分の目を疑うほど、カツ姉は若々しく美しく眠っておられました。お化粧しておられるお顔は三十歳位に見えました。　感激の余りに思わず涙がこみあげて来ました。　初めてお会いしたあの日から、この小さい者のために祈り続けてくださった懐かしいカツ姉。　お別れは悲しいのですけれど主イエス・キリストの証人として、まことに麗しい模範を私に残してくださいました。　私もまた、かしこに勝利の凱旋をさせて頂いて、老姉の笑顔に迎えられる日を楽しみに生きていきたいと思っております。

河本カツ姉の思い出

伊規須　太郎

「主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。　あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。　地はあなたの造られたもので満ちている」　（詩篇百四篇二十四節）　河本さんの上になされた神様のみわざは実に素晴らしいものであったと思います。　最も強く印象に残っているのは、神様に対する態度がはっきりしておられた事です。　どなたに対しても「神様を離れたらだめ、まず神様に従って祝福を得なさい」と言われていたとのこと、お体が弱られてから、自宅で礼拝の実況を聞きながら、厳かに礼拝を守っておられたお姿が目に浮かびます。

よく、「ぐじぐじしない」と言うような事をおっしゃっていましたし、その通

りに歩まれた方であると思います。畠山姉の手記を読ませて戴きますと、何でも出来る方であり、強い方であった事がよく分りますが、それは決して肉の力ではなかったと思います。

思えば、河本さんご夫妻に初めてお会いしたのは、昭和二十六年春のある早天祈禱会においてでした。　必ず一番に祈っておられたお姿は、今でも忘れる事が出来ません。私たちの為にも、どんなにか祈ってくださった事と思います。　最近でも、戸畑教会の早天祈禱会で、ご夫妻を思出す事が、よくあります。

以上、一言、思い出を書かせて戴きました。

1986.9.28 記

河本のおばあちゃんの思い出

大口　種義

「あなたがたによく言っておく。　わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、即ち、わたしにしたのである」。

（マタイ二十五章四十節）

河本のおばあちゃんの事を思いますと、聖書のこの所の聖言を思います。

八幡前田教会で、最も弱い小さな私共のためにここに書かれている通りにしてくださいました。　その二、三の例を申しますと、二十年程前から、同じ障害を持つ方々への伝道のため、シロアム会を始めました。そして、毎年、一、二回の盲人の先輩たちに協力を願いまして、近県の方々が集って、修養会をしておりま

すが、いつもその時、おばあちゃんが数十名分の茶菓や飲物を、差入れてくださいました。　また、その頃は、日曜礼拝のあと、マッサージをと、私共を自宅に呼んでくださり、実は、昼食を大変な御馳走をしてくださるためでした。　そんな時には、ご家庭の穏やかな、温かい中にきちんと整頓され清潔なご様子など、教えられる事ばかりでした。　また、私共の家庭の事を常に心に掛けてくださり、息子の養育の事などそれとなく教えて、常に祈ってくださいました。　数上げればキリがありませんが、この様に、始めに申し上げました聖書のお言葉をその通りに、歩んで行かれた信仰のご生涯であったと思います。

おばあちゃんは、天国において、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなた方のために用意されている御国を受つぎなさい」（マタイ二十五・三十四）と、この様な神様のお誉めに与かっておられる事と思います。

河本のおばあちゃん

大口　和子

河本のおばあちゃんが、エステル会の一員である私のために、大切な、大切な聖言を残して頂いて、感謝に絶えません。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。　神を信じ、またわたしを信じなさい」。　（ヨハネ十四・一）

私の母が元気でおりました頃から、私と主人との結婚につきまして、何も出来ぬ私のために、大変忙しい中に、特に、ひたすら祈ってくださいました。　その当時は、私は、そんな事は存じませんでした。

視力の弱い私のために、また、息子の力が生まれるお産の時にも、真剣に祈ってくださった事など、感謝の気持ちも忘れて終って、とくに、おばあちゃんがお

具合悪くて入院された時にも、お見舞いもいたしませず、大変に申し訳ない事と存じています。　これからは、只、おばあちゃんの残してくださった聖言により、信仰の道を一歩一歩、たどり行きたいと祈らずにはおられません。　何時の日か、やがて、天国でお目にかかれるように、また、今の戦いを立派に戦いぬき、限りなき命に与かる様に、いかなる中にありましても、「心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」とおおせられるイエス様に、全幅に信頼をもって進みたいと思います。　思い出は尽きませんが、これで私のお証詞を終わります。

わたしは平安をあなたがたに残して行く

下松　光子

昭和三十五年、娘の下川薫子受洗を機会に入信いたしました。　河本さん宅の婦人会に初めて出席させて頂きました。　右も左も分らないような私に、ほのぼのとした温かさは、今もって忘れる事が出来ません。

いつの日だったか、婦人会より大分県の日出の別荘に一泊させて頂き、夕日の海に喜びの感謝を捧げました事、また、行き届いたおもてなし、すべておばあちゃんのお人柄を身に受けて帰途に着きましたが、今もって懐かしい想いは脳裏を離れません。　ありがとうございました。

おばあちゃんの召天の前日木曜会の帰り、水村と共に済生会病院に行きました。不思議な神様のお導きだったのでしょうか、病床にあられるおばあちゃんは面会

謝絶とお聞きしておりましたので、唯々、お祈りをさせてもらっておりました。おばあちゃんにお会いできないのが残念ね、と話していました所に、河本の奥さんに出会いました。「面会が出来ますよ。　今、回診中ですぐ終わりますので待ってね。　おばあちゃん、喜びますよ」とおっしゃってくださいました。　思いもかけない面会に感謝で一杯でございました。　神様に感謝と共におばあちゃんのお顔に接して涙が止まりませんでした。　二、三分の面会でありましたが、「あなた達も元気でね」と言われ、しっかり手を握り、手を振って病室を出ました。　誠に行き届いた奥さんの看護、お優しいお孫さんに取り囲まれて、ほのぼの心暖まる想いで病院を出ました。　奥様との偶然な出会いは神様の御計画であり、すべてが御手の中で成される業に頭を下げるのみでございます。

翌日、おばあちゃんの召天のお知らせを頂きました。　しっかり手を握ってくださいました手の温かさは、忘れる事が出来ません。　天国で安らかにお休みなさい、とお祈り申しあげました。　信仰によって勝得て余り有る生涯を送られま

した。　おばあちゃんのお姿を思い浮かべて書かせて戴きました。

河本カツ姉を偲んで

小松　南子

おばあちゃんの大きく優しい美しいお姿がいつもの席に見る事が出来なくなった寂しさは、少しづつ薄らいでまいりましたが、おばあちゃんの素晴らしい信仰の歩みと老いてなお整然とした、お姿は私の心の中に焼付いております。　また、なんどかお宅にお伺いさせて頂きました折には、おばあちゃん自ら、美味しいお

茶を入れて下さり、お菓子をいただきながら、信仰のお話や若い時の事など、いろいろお話をうかがいとても楽しい時をもたしていただいた事など、ほんとうに忘れる事が出来ません。　今思えば、もっともっと厚かましくお伺いしていろいろお話をお伺いすればよかったと残念に思います。

また、私達にとって、一番大きな事は、今こんなに素晴らしい教会で、こんなに素晴らしい恵みの中に置かれている事…、どんなに大きな祈りと、ご心労があったことかと、只々、感謝でいっぱいです。

それとおばあちゃんの老いてなを頭の先から足の先まで、一糸乱れぬ美しいお姿を保たれておられる心くばりには、ただただ頭が下がる思いでした。　お部屋だけの生活になられましても、突然お伺いしてもと思い、御都合をお尋ねして、お訪ねしますと身を整えて迎えて下さいました。　入院されましてから、おばあちゃんのお気持ちを思い、お見舞する事が出来ませんでした。

しかし、もう一度お元気になられてお目にかかれる日を楽しみにお待ちしてお

りましたが、その願いもかなわず、お別れして心残りに思いますが、私の中にはいつものお元気なお美しいお姿が永遠に残されました。　人に優しく、自分に厳しく、ただただ神様に信頼して、大きな川の流れのような人生を過ごされ、どんなに多くの方々がその恵みにあずかり、今もなをその川は大きく流れ続けていると思います。

「一つの川がある。
その流れは神の都を喜ばせ、
いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる」。

詩篇四十六篇四節

河本奥様の思い出

榎本　百合子

河本奥様とお目に掛かったのは昭和十五年六月、私共の結婚の仲人として、ご主人様とお二人でお出で下さいました。　まだお若く、四十歳を少し過ぎた位だったかと思います。　綺麗な奥様でした。　その年の十一月、八幡へ参りましてから、四十五年位になるでしょうか、あの時この時と懐かしい思い出が甦って参ります。　大変お世話になり、また祈って頂きました。

私共が生活出来るように、炊事道具一切を揃えて頂いていました。　お店の忙しい中に各集会の一切を用意し、綺麗なお花も入れてくださっていました。　クリスマスにはお赤飯を炊いて、子供達を入れて二十人位の方々と楽しい祝会をしたことを思い出します。　戦争が激しくなると夜の集会は出来ませんでした。

戦災で集会に使わせていただいていた河本さんのお家も、私共の家も、全部焼けるまで礼拝を守らせていただきました。

戦後、昭和二十二年に初めて会堂、牧師館が与えられ、あふるる感謝の中に献堂式をいたしました。　午後の感謝会の御馳走、また、毎年のクリスマスには奥様のてずくりで御馳走になりました。　かしわ飯をたくさん炊いて下さった奥様の味を忘れられません。　新しい会堂、牧師館の棟上げには八十歳近くだったと思いますが、白いエプロンがけで赤飯、お煮もの等を喜び喜んでもって来て下さいました。　その時のお姿が今も思いだされます。　献堂感謝会の時には、「河本がおりましたら、どんなに喜んだ事でしょう」とおっしゃって、感謝しておられました。

各ご集会にお体が御不自由になられるまでお出になっていましたが、御不自由になられてから、スピーカーを通してお家で礼拝を守られ、「これまで出られなかった夜のご集会も出させていただけて、こんな幸いな事はありません」と喜ん

でおられました。「かくなるを得しは神の恵みによりてなり」といつも主に感謝されていました。

三年前、和義が献身してまいりました時、大変喜ばれ、「永い間祈っていました。主は真実にお答え下さいました」と涙を流して喜ばれ、「先生、どんなに喜んでおられるでしょう」と祈った者でなくては味わえない喜びを表して下さいました。教会の祈り手が次々とお召されになり、肉においては寂しさを感じますが、天国において今も祈って下さっている事を思い、やがて、遠からずお目に掛かる時、共に主を崇めさせていただく事を望み、奥様が祈って下さった多くの方々のために祈らせていただき、この世の旅路を全うさせていただきたいと願っております。

（昭和六十三・六・二十五）

＊あとがき＊

河本姉が召されて、三年数ヶ月が過ぎようとしています。　世では「去る者日々に疎し」と言われるが、姉の信仰生涯を振返る時、神様の御言葉の真実を色鮮かに見るようです。

具体的な問題や事柄は違っても、姉を通して働かれた神様は、私共にも同様に、信頼する者に真実なご愛をもって、応えてくださる事を信じさせていただきました。（和）

「主はわたしの牧者」
―河本かつの信仰生涯―

編集者　榎本　利三郎
北九州市八幡東区前田一丁目

発行者　河本　信生
北九州市八幡東区前田一丁目

昭和六十三年十二月一日　印刷
昭和六十三年十二月十日　発行